-IS S・N- インフィニット・ストラトス 侍、忍び、異世界へ

海龍会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
－ＩＳ　Ｓ・Ｎ－　インフィニット・ストラトス　侍、忍び、異世界へ

【Ｎコード】
Ｎ０１９０Ｕ

【作者名】
海龍会

【あらすじ】
居合剣術道場主の息子、柳生浩十郎と忍びの里の次期長の第三十六代目服部慶三魔兼定が模擬戦闘を行ってるさなかまばゆい光に包まれた。
目を覚ますとそこは女性にしか扱えないＩＳと呼ばれるパワードスーツがある世界であった。

エブリスタで投稿していたものが何故か非表示になったのでこちらで投稿することにしました。悪しからず

零　プロローグ（前書き）

執筆済みの話は毎週水曜、土曜に投稿していきます。
投稿が執筆に追い付いた場合は不定期更新となります。

零　プロローグ

キィィィン　キィィィン
平原に響く金属音、それはぶつかり合う二人の人影から発しられていた。
「腕上げたんじゃないのか？宗一」
「戦闘中だ。敵に話し掛けるものではない。それに今は慶三魔だ。よく覚えていろ」
「了解しました。慶三」
日本刀と忍者刀と呼ばれる小太刀ほどの直刀がぶつかり合う。
「慶三、魔だ。浩十郎、少しは戦闘に集中したらどうだ？」
忍者刀を持つ忍装束の男が日本刀を持つ侍のような出立ちの男に尋ねた。
「集中してるよ。他人には見えないだけでねっ」
浩十郎と呼ばれた男は忍者刀を持つ慶三魔と呼ばれた男を弾き飛ばした。が、慶三魔は空中後ろ宙返り三連続を決めきれいに着地をした。「さて、どうするよ？普通にやっててても面白くないよ」
「普通にやっててこそ。双方の力量を確かめられる」
そう言い、慶三魔は忍者刀を後ろに背負った鞘に戻した。
「しかし、お前の言うことにも一理ある」
「だろだろ？だからいつも通り…」
「双方の最高の業をぶつけ合う…か。良いだろう。それも一興だ」
そう呟き、慶三魔は背に背負った刀の鞘の先と柄を掴んだ。
「そういう事」
浩十郎も刀を鞘に納め、腰を低くし左手を鞘に、右手を柄に添えた。
「忍型小太刀二刀流奥義」「柳生流抜刀剣術奥義」
二人が同時に技名を口にし、鞘から刀身を出す。
「瞬天黒影斬」「昇天蒼跡斬！」
二人同時に一歩踏み出すとどちらも姿が消え、ちょうど離れていた

距離の半分くらいでぶつかる音が響き、先程とは逆の立ち位置となって現れた。
「また、互角、か」
そう呟き、慶三魔は刀を鞘に納め、浩十郎の方を向いた。
「そういうこったね」
浩十郎も同意し刀を納めつつ振り向いた。
「「ぇ？」」
振り向くと二人の目の前に先程まで無かった一つの光の玉があった。
ソレは徐々に大きくなり、いきなりの事で呆然としていた二人を飲み込み消えた。

登場人物（前書き）

最新話に従い設定を追加して行くためネタバレが嫌いな人は飛ばしてもらって構いません。
現在、拾陸話まで

登場人物

第三十六代目服部　慶三魔　兼定（はっとり　けいぞうま　かねさだ）
本名　服部（はっとり）　宗一（むねかず）

一人称は俺
服部半蔵の子孫であり先祖以上の忍術の天才である。
カラスを操るのが得意で黒影（こくえい）と名付けたカラスを飼っている。
基本的に感情を表すことがないがキレると言葉遣いがいつも以上に荒くなる。
数年前に不慮の事故により仕事仲間を亡くして以降、浩十郎以外の人との関わりを断っていた。
その事故の責任と禁忌の術を発動させかけたことにより処罰として禁薬を飲み多重人格者となった
祖父の第三十四代目服部慶三魔の『女性が困っていたらたとえソレが罠であろうと助けろ』という教えを忠実に守っている。
彼の中での優先順位は
女性＜＝黒影＜男性

宗子

一人称は『あたし』又は『わらわ』
慶三のもう一つの人格で、ある薬により生まれた多量人格の中でも女性的人格が寄せ集まって完成された人格であり、現在では慶三の片割れ的な存在になりつつある。
人格が彼女に変わると薬の影響か身体も人格に合わせ変化する。
（モノは残る）

性格は自分で小悪魔だと言っているが基本、場を和ませるお気楽楽観的思考の持ち主でその延長線上でイタズラ好きな感じになっている

柳生（やぎゅう）　浩十郎（こうじゅうろう）

一人称は僕

居合剣術道場主の息子で親以上に剣がたち、彼の太刀筋を見たものは柳生十兵衛の生まれ変わりと称する。

慶三魔とは対称的に感情豊かで人付き合いは良いが、一日の大半を女気のない剣道場で過ごしているせいか軽度の女性恐怖症化している。

その為、女性と話すときは友達であっても敬語で話し、至近距離まで接近されると反射的に十メートルほど離れて、不意に抱きつかれたりしたら例えそれが彼女でも振り払ってしまう。

鈴と付き合いだしてからは少しはマシになってきている。それでも鈴以外と話すときは敬語で話す。

家に居るときや、決闘の時は大業物（そうき）蒼輝を腰に据えていて、それ以外の外出時は小太刀を懐に忍ばせている。

シャルル・デュノア

フランスの代表候補生

この世界の人間として二番目にＩＳの操縦が出来る男で、慶三のルームメイト

凰（ファン）　鈴音（リンイン）

一年二組在籍
中国の代表候補生
一夏を追ってＩＳ学園に転入したが色々あって浩十郎と付き合っている。慶三との仲は良好で慶三が他の女子に手を付けられたらその女子を殺しに生きそうなほど大好きである。

オリジナルＩＳ解析（前書き）

登場人物同様、新たな設定を追加していくに従い更新していくので
同様にネタバレなどが嫌いな人はすっ飛ばして貰って構いません。
※設定の変更もあり得るので悪しからず
現在、拾陸話まで

オリジナルＩＳ解析

黒影（こくえい）

解説

服部の第四世代型ＩＳ
頭部以外の全身装甲で、ハイスペック過ぎるため黒影自身がリミッターを付け性能を下げている。
背部はガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹのデスティニーガンダムのバックパックの翼が付いている。
機体カラーは漆黒

武装

苦無、暗夜刀以外の忍び道具もあるが余り使う機会はない

苦無（クナイ）

忍び道具のＩＳサイズの苦無。爆破機能があり、避けられた場合でも爆破が可能。

暗夜刀（あんやとう）

ＩＳサイズの忍び刀。納刀時は大太刀の様な外見で直刀の小太刀が二本しまわれている。ビームを展開し太刀の長さまで伸ばす事が可能。しかしリミッターをかけている為、シールドエネルギーを大幅に消費してしまう。

烏丸（からすま）

狙撃ライフルで実弾とビームどちらも放てる。

黒鴉（シュヴァルツェア・クレーエ）

鴉の形をしたビット兵器を放ち、鋭利な翼で敵を切り裂き、腹部に搭載された小型ビーム砲からビームを放つ。
操作方法は音無し笛の音色と吹き方

仕様能力

黒翼展開（ブラックウィング）

黒影の単一仕様でデスティニーガンダムの光の翼の如く背中のウイングが展開され黒い粒子を放つ。粒子にビームが当たると黒影のシールドエネルギーとして還元される。

同調能力（シンクロシステム）

多重人格者である慶三にしか扱えない限定能力（リミテーションアビリティ）
慶三とは違う人格『宗子』が扱う所謂宗子専用機へのモードチェンジと言うべきものに変化する。
外見的変化はカラーリングが黒から白へと変更され、宗子人格になるとき顔が変わるためソレを隠すために００外伝に出てくるガンダムアストレアのセンサーマスク状の頭部装甲が追加される
初期はラウラの行動に激昂する慶三を抑えるために宗子が身体を乗っ取るのと同時に発動していた。

武装（同調能力時）

白い鳩（ヴァイス・タウベ）

黒い鴉（シュヴァルツェア・クレーエ）が変化したものであり外見が白くなった以外性能に代わりはない

蒼跡（そうせき）

解説

柳生の第四世代型ＩＳ
頭部以外の全身装甲で、黒影同様、ハイスペック過ぎるため蒼跡自身がリミッターを付け性能を下げている。
背部はガンダム００のＧＮアーチャのバックパックに似た形状の複合ユニットである
機体カラーは風をイメージした白と青

武装

火力の大半が背部の複合ユニットに集約されている。

蒼輝（そうき）

腰部に取り付けられている青い鞘に納まった太刀。納刀時に刀にビーム粒子を付着させ抜刀の勢いで飛ぶ斬撃を放つことが出来る。

白輝（はっき）

白い鞘に納まった小太刀。主に近接時の防御、中距離の相手に放つのに用いる。

マグナム

牽制武器として用いる六連倉回転式拳銃

サブマシンガン

牽制と弾幕展開に用いる中距離射撃武器

複合ユニット（ＣＭＢ）
背部に搭載された二対のユニットで上部は大型ビーム砲×各1、中部には小型ミサイル×各１８、煙幕弾×各６の格納庫、下部は大型ブースター。
砲撃時は複合ユニットの上部が前方を向くように傾く。

仕様能力

瞬間移動（テレポート）
蒼輝の単一仕様能力
複合ユニットを砲撃時の状態にし、各部に隠された小型ブースターを展開し、瞬時加速の二乗近くの加速力を生み出し突撃する。

陽炎（かげろう）
リミッター解除時のみ使用可能な限界能力（リミットアビリティ）
装甲色が青と白から赤と橙に染まり多方向に瞬間移動が可能になるしかし、あまりに速過ぎるため機体がＧに負けて破損しないために連続使用時間が五分と制限されて解除してから少しの間は限界能力使用の反動で絶対防御が作動しなくなる（元ネタ００のトランザム）

ゴーレム改

解説

一夏と鈴の対戦に乱入した無人ＩＳ
浩十郎に破壊された後、学園の地下施設に保存されている
ジムヘッドにＶ字アンテナを取り付けた様な頭部、アレックスの腕部、デスティニーのマニュピレータ、ストライクフリーダムの上半身、フリーダムのバックパック、ジャスティスの下半身で構成される全身装甲のＩＳ
試作機兼無人機であるため高度な演算が必要なドラグーンではなくフリーダムのプラズマ収束ビーム砲を代用している

装備

腕部ガトリング砲
三門一組のビームガトリング砲で牽制または迎撃に用いられる。

パルマフィオキーナ
掌に備え付けられた近距離ビーム砲（詳しい事はｗｉｋｉのデスティニーガンダム参照）

プラズマ収束ビーム砲
バックパックの翼の内に隠された左右一門のビーム砲でこの無人機は奇襲に使うことがよくあったらしい…

カリドゥス複相ビーム砲
腹部に設置された金色の砲口から発射される高威力のビーム砲

脚部ビームサーベル
脛近くのビーム発振機より生み出されるビームサーベル、蹴りによる攻撃力を高める。

壱　侍、先に転入する（前書き）

自分の中では忍びが主人公ですが忍びは原作二巻までいかないと出てきません。

壱　侍、先に転入する

「ん…あれ？何だ此処は？」
そこは白い部屋で浩十郎はそこに置かれたベッドに病院で着る白衣に似た服を着て寝ていた。そして、部屋の四隅には監視カメラがあり、ベッドの前方には扉があった。
「えっと、確か俺は…そうそう慶三と模擬戦をしてて…あれは閃光弾だったのか」
そう考えていると扉が開き女性が入ってきた。
「目が覚めたか」
「えぇ、まあ。貴女は…誰ですか？」
敬語で尋ねるも声には殺気に似た気を含んでいた。
「全く、訓練場で倒れていたお前を助けてやったというのに」
「…ですから誰なんですか貴女は？僕としましては女性を敬称で呼ぶのは余り好きではありません」
「…私は織斑千冬だ」
「織斑さん、でよろしいでしょうか？えっと此処はどこですか？」
「ＩＳ学園だ。知っているだろ？」
「ＩＳ学園…？すみません、知らないんですが…どういうものを学ぶんですか？」
「本気で言っているのか？」
千冬と名乗った女性は驚きの声を上げた。
「僕の目は嘘を言ってるように見えますか？」
「…確かにあの格好は時代劇ぐらいでしか見ないな」
「そういえば、僕の服と刀は何処に？」
「心配するな、こちらで預かっている。それとこれに見覚えはないか」
千冬はそう言い、何かを浩十郎に投げ、浩十郎はソレを取る。
ソレは青い宝石の付いた指輪であった。

「いえ、見たことないです」そう答え、指輪に付いた宝石を触る、すると光り輝いた。
『お早うございます。我が主。』
「わっ！？」
いきなり指輪から女性の声がしたため浩十郎は驚き、指輪から手を離すとそれは淡く光り浮き上がった。
『すみません、驚かしてしまいましたね。私は蒼跡と申します。』
「蒼跡、か。とりあえず、此処の説明を願う」
『了解です。』
ＩＳと言うマルチフォームスーツ、それを学ぶ先程話したＩＳ学園、それらを含むここの世界の歴史などなど
「なるほどな」
「そろそろ、私にも説明してもらっても良いか？」
『えぇ、私が分かる限りで…』
蒼跡は千冬に浩十郎のいた世界について教えた。
「なるほど異世界か。信じられないがそういう事なら信じるしかないか。では、貴様の名前を聞きたい」
「柳生浩十郎です」
「そうか、なら。柳生、お前の処遇は私に任せてもらっても良いか？」
「今のところ、信用できるのは貴女だけですから。お願いします」
「わかった。なら、柳生。貴様にはＩＳ学園に通ってもらう。異論はないな」
「ないです」
「それと、そのＩＳの解析をしたい」
「僕の監視の下ではダメですか？それが条件です」
「良いだろう。ではこちらに」
「いえ、解析する迄、僕が持っています。異論はないですか？」
「そのくらいなら良いだろう。着いてこい」
そう千冬は納得し、浩十郎を連れ出した。

「あ、そうだ。人探しをお願いしたいのですが良いですか？」
「構わないが。誰だ？」
「服部慶三魔兼定です。多分、彼も此方の世界に居ると思うので」
「分かった探そう。」その後、蒼跡のデータを研究者達に見せた。
浩十郎には内容はさっぱり分からなかったが研究者達の反応で何となくすごいものだと理解した。
「柳生、実戦のデータを取りたいのだが良いか？」
「良いですけど、乗り方分かりませんよ」
「貴様のＩＳに教えてもらえば良い。着いてこい」
千冬はそう言い移動し始めたので浩十郎もそれに従った。

着いた場所は円形の舞台とソレを囲むように観客席がありそこに先程の研究者達が座っていた、千冬曰く此処をＩＳアリーナと言うらしい。
俺はその中央に立ち、その周りを此処の教員がＩＳを展開していた。しかし、何とまあ、一度慶三の家に行ったときにいたくノ一以上のスーツだな。あの衣裳よりも薄いだろ。
『変な事考えないで、展開してください。集中してＩＳを展開するイメージをしてください。』
目を閉じ言われた通り意識を集中させ、先程のデータに出てきた蒼跡のイメージする。
すると光の粒子が目の前に溢れ体が軽くなる。
目を開くと、僕はウェットスーツを着て、その上に騎士甲冑のような流線形で風をイメージさせる蒼と白のカラーリングの外装で、左腰には僕の愛刀蒼輝に似た剣が装備されている。
「これが蒼跡」
良い感じ、親父のバイクで走った時のマシンとの一体感を思い出す。
『展開したな。初めに飛んでみろ。やり方はまわりに居る教員に聞けば良い』
織斑さんがそう言ったので、オープンチャンネルという機能で聞い

てみた。
『補助は出来る限りしますので思い切りやってください』
了っ解！
そう言い背中に搭載されている二基のブースターを発動させジャンプし、上方に角錐を展開するイメージをし飛翔する。
急速上昇し、停止。すぐに前方に方向を換え、急停止し後方へ、高速で急カーブし、自由落下で落ち地面まで二メートル地点で急停止。
操縦者保護機能により普通なら失神してるであろう軌道でも平気と云う、凄いのだがどういう原理なのか理解できない。
『そのくらいで良い。次は戦闘だ。五つあるバルーンを破壊してみろ』
織斑さんがそう告げると円形のアリーナの隅に４つ、中央に一つバルーンが現れた。「了解しました。蒼跡、武器は？」
『蒼輝で手慣らしをしてみてはどうですか？』
「確かに、やってみるか」
そう言い、急加速し隅にあるバルーンに接近し、打ち下ろし。
方向転換をし、対角線上にある中央のバルーンを擦れ違いざまに抜刀術で切り裂き、そのまま３つ目のバルーンを袈裟懸け。
４つ目のバルーンは抜刀により生み出される光の斬撃を打ち込み、最後のバルーンはバックパックのビーム砲を放つ。
「終了ぉ」
『さすがだ』

それから数日後
編入するのは一年一組で、この中途半端な時期の転校に意味を作るためにカナダの代表候補生となった。
で、今日転入するわけだけど蒼輝は携帯するのは問題ないらしい。
いや、外出時は小太刀だよ。銃刀法違反で捕まりたくないし…
「では、ここで待っていてくださいね」

と、山田先生の言葉で気付くともう教室の前であった。
で、待っていると織斑さ…否、織斑先生が中に入っていき、その数秒後、ハリセンで叩いた様な音が響いた。
何の音だと考えていると山田先生に呼ばれて中に入った。
すると先程までザワザワしていた教室は静まり返り、僕を見て目を見開いていた。
正直、怖いです。二人目のＩＳ操縦者が現われたから驚くのは無理はないけど。うん、怖い。
「えっと、日本国籍ですけど、カナダの代表候補生の柳生浩十郎です。皆さん、どうぞよろしくお願いします」
そう言い礼儀としてお辞儀をするも、全く無反応。うん、無反応はちょっとムカつくぞ。
「き」
「き？」
「「「「きゃあああああ！！」」」」
女性特有のキー音の高い甲高い声が響き、窓ガラスをも振動させた。
余りの事に接近されたわけでもなく後ろに下がり黒板にぶつかる。
「男子！！しかもイケメン！！」
「剣心さまだわ！！」
「私も切り裂いてぇ！！！」
こ、怖っ！！
何？何だよ？女子ばかりだから男に飢えてるのか？！この人達は！？
「静かにしろ、ＨＲ中だ。柳生は空いてる席に座れ。この後は直ぐに第一アリーナで二組と合同で訓練を行う。以上でＨＲを終了する」
織斑先生に言われた通りの場所に座り、バック中身を机に入れていく。…目線が痛い。
「織斑、柳生を更衣室に連れてやってくれ」
織斑先生に言われた男子生徒が近づいてくる。
この人が山田先生が言っていた織斑先生の弟か。
「織斑で良いのかな？よろしく頼むよ」

「一夏で良いぜ。こちらこそ」
「あぁ」
軽く挨拶を交わし、更衣室に向かう為教室を出た。

更衣室に着き着替えを始めた。
「なあ、浩十郎。数日前、何があったんだ？」
っ！やっぱりそれを聞きますか。
「さあね、よく覚えてないよ」
まあ、その状況はちょうど見ていた山田先生からちぐはぐながら解読したしな。
「どうしてＩＳなんかを使えるかも理解してないしね。はい、終了お」
そう答え、着替え終えロッカーを締める。
「早っ！？」
「話しに集中してるかそうなるんだよ。はい、急いで急いで」
そう急かし、一夏の着替えを早ませる。

一夏の着替えも済んだのでグラウンドに着くとまだ時間まで少しあった。
『ねぇ、あれが例の？』
『うっそー、美形じゃない』
『何で一組なのよ、二組に下さいよ。その人材』
ヒソヒソ話じゃない女子達のヒソヒソ話が聞こえてきた。まぁ、無理もないけどね。

弐　侍、騎士に挑む（前書き）

タイトル通り侍と騎士の戦いですが、戦闘描写は期待しないでください。

弐　侍、騎士に挑む

「さて、全員揃ったようだな。まず初めに、専用機持ち同士で模擬戦をしてもらう」
僕が知ってる話だと一年で専用機持ちは僕と一組の一夏、イギリスの代表候補生セシリア・オルコットさん。
四組に一人居るらしいけど今は関係ないね
「織斑と柳生に模擬戦をしてもらう」
へぇ、一夏とするんだぁ
「え？浩十郎も専用機持ってるんだ」
「まぁね。じゃ、よろしく頼むよ」
まあ、近接対近接だしね。良い勝負になるよ。絶対に…

空中に浮かぶ、青と白の二機のＩＳ
１つは浩十郎が操る蒼跡、もう１つは一夏が操る白式
「初め！」
千冬の合図で、浩十郎は蒼輝に手をかけ、一夏は雪片弐型を両手持ちし突撃してくる。
「牽制、飛斬撃連」
そう呟き、連続で抜刀し、ビームの斬撃を放つ。
「のわあぁ！？」
装備が剣だけと甘く思っていたらしく一夏は変な声を出しギリギリで避ける。が、擦ったらしく一夏のシールドエネルギーが少し減る。
「ミサイル発射ぁ」
バックパックの複合ユニットがビーム砲発射形態になりユニット中間部のハッチが展開し小型ミサイルが一夏目がけ放たれる放たれる。
「げっ？！」
不意打ち気味に一夏に直撃する。

「……近接する前に終っちゃったかな？」
そう言いつつも、浩十郎は爆煙の中を伺う。
「うおおお！！！」
その刹那、ビームソードを持った一夏が爆煙の中から飛びだしてきた。
浩十郎は驚きつつすぐに反応するも、少し遅く唐竹を受けシールドエネルギーを大幅に削られた。
「これが、零落白夜」
一夏のＩＳ情報調べておいてよかったぁ。確かに、こんなもん受けたら一溜まりもないね。
二撃目を与えようとする一夏の攻撃を避け、その場で宙返りをし、ユニットのブースターが一夏に向いた瞬間加速させ一時離脱する。
「さて、こっちもやるか。瞬間移動（テレポート）発動」
蒼跡のバックパックがビーム砲発射形態になり、各部に収納されていた小型ブースターが展開された。
「柳生流抜刀剣術奥義」
蒼輝を鞘から少し出す。
「昇天蒼跡斬！」
蒼跡は全ブースターが最大出力のと同時に姿が消え、白式の後ろに立った。
「…斬滅完了、なぁんてね」
チーン
蒼輝の納刀音が響くのと同時に白式のシールドエネルギーが０になり、模擬戦は浩十郎の勝利で幕を閉じた。

模擬戦終了後、ＩＳの操縦訓練をし昼休みに入ったので、浩十郎達は食堂に向かい昼食をとった。
「はぁ…」
一夏は浩十郎に負けたのが相当悔しいのか先程から溜め息しか吐い

ていない。
「そう落ち込む事じゃないよ。誰にでも負けることはあるさ」
「俺の方が連続稼働時間は長いはずなのに…」
「だから、鍛えておけば良いものを…あのくらいのミサイル、切り裂いてみろ。最初の時よりは距離があったであろう」
「いや、そんな事出来るのは僕が知ってる中で山籠もって修行してるくらいの人ですよ…」
箒の言葉に浩十郎はこの世界に居るであろう修行大好き忍者を思い出しながら返す。
「にしても何なんですの?あの加速力。消えましたよね?」
「あ、それはこの蒼跡の単一仕様能力の瞬間移動です。蒼輝以外に使われるシールドエネルギーを全てブースターに直結させ、瞬時加速の…何倍だったかな?まぁ、良いんですけど。つまりハイパーセンサーでも視認出来ない加速力を生み出すんです」
「操縦者保護機能があるにしてもそんな急加速は…」
「まぁ、そこは鍛えてますし」
そうセシリアに追加説明をする。

午後の訓練も終了し、部屋に向かっていると、目の前に織斑先生が居た。
「どうかしましたか?」
「お前の探していた男見つかったぞ。全く国際ＩＳ委員会に問い合わせても出てこないと思ったら…スイスに居るとは」
どの世界でも永世中立国なのかスイスは…いや、それよりもっ
「元気なんですか?」
「心配するな。目が覚めて飯食ったら元気になったらしい」
「はぁ、それで慶三には何時会えますか?」
「さあな。一応スイス軍からもこちらに来いと言ったらしいんだが…」

「だが？」
次に聞いた言葉は彼らしい言葉だった。

「助けたお礼と寝てた分のトレーニングしたいから一、二ヶ月こっちに居るとの事だ。後、女尊男卑でふにゃけたスイス軍の男子を叩き直すって言ったらしい。」

その言葉を聞き彼らしいなと心の中で笑った。
「少しは手加減してくださいとお伝え願います」
「あぁ、分かった」
やっぱり居た。早く会えないかなぁ…

参　忍び、スイスでの一日

『慶三さん、準備が出来ましたよ』
スイス軍仮設ＩＳ部隊の一人が俺にそう声をかける。因みにＩＳには高性能過ぎる黒影にスイスでの主要言語の一つであるドイツ語を習ったので翻訳してもらったわけではない。
「了解した。これより黒影の訓練を始める」
細身で漆黒の外装をした黒影を展開しピットより外に出る。
『慶三さん。今の所、委員会に加盟したてでＩＳも全て出払っているので今のところ我が部隊に存在するＩＳは貴方の黒影だけです。なので実戦のような事は出来ませんが操縦訓練は出来ます。』
「重々承知している。此方も乗るのは二度目でも訓練は初めてだからちょうど良い。実戦はＩＳ学園ですることにしている」
まあ、二三日寝てた体には良いウォーミングアップになろう。
『分かりました。では、高速で動く的を破壊してください』
どういう原理か知らんが的が十個あらわれ通常では破壊出来ない速度で動きだした。
「了解した。苦無６」
『御意』
黒影の声と同時に六つの苦無が現れ、それを両手の指の間に持ち、マルチロックオンをし放つ。
全て的に当たり崩壊する。
「黒鴉（シュヴァルツェア・クレーエ）」
背部の翼に付いた四つの黒い卵形の装備のうち２つが外れ落下、同時に鴉のような形に変化し、突撃する。
縦横無尽に動く二つの的を切り刻んでいく残り二つ。
「狙撃ライフルを」
『御意、烏丸（からすま）を展開。』
空をはばたいている鴉達を戻し、展開したライフルで狙いを定める。

軌道予測をし放つ、ランダム軌道でもどこかにパターンはあるものだ。
それが分かれば予測地点でど真ん中を打つことも可能だ。
『さすが慶三さんですね』
「誉められる事をしてはいない」
『でも凄いですよ。機動試験を一度しただけですのにここまで出来る事は…』
と称賛の言葉がツラツラと言い始めた。
「すまないが戻っても良いか？」
『あっ、はい。すみません…』
同意を聞き、ピットへ戻る。

その後は広い平原を使いトレーニングをした。
軍の食堂で昼食を取っていると先程の女性がやってきた。
「ご一緒しても良いですか？」
「構わない。えっと…」
「あ、はい。ディニス・ソシュールです」
癖なのか敬礼しながら名乗った。
「あぁ、ソシュールか。確か、君が助けてくれたんだな」
「い、いえ偶々湖に通りかかっただけですから。それとディニスで良いです」
手を左右に振りながら謙遜する。
「そうか。いや、偶々であろうが人を助けたんだ。誇っていいと思うぞ。」
「け、慶三さんにそう言ってもらえると嬉しいです」
照れているらしく赤くなるディニス。
「あの、午後は何をなさるんですか？暇でしたらスイスをご案内したいのですが」
「すまない、午後も訓練をしたいんだ。いつか時間を作る」

「そうですか…」
ガッカリと体で表すように肩を落とすディニス。

身体訓練とイメージトレーニングをし、夕方頃戻るとディニスが息切れを起こしながら走ってきた。
「慶三さぁん、ハァ、ハァ…」
「大丈夫か？」
「は、はい。慶三さんにお伝えしたい事がありまして…」
「俺に？」
「あ、あの。国際ＩＳ委員会に慶三さんの捜索がだされていました。それで確認をとりましたら…」
「柳生浩十郎が居たのか」
「は、はい。ＩＳ学園に」
「そうか。なら、もう少し訓練してから行くことにしよう」
「な、何故ですか？」
「元の身体能力以上の力を身に付けずにアイツに会ったら何言われるか知れたこと。それに、此処の男共は女尊男卑か何かは知らんが腑抜けているからな恩返し代わりに鍛えてやる」
そう決心し、浩十郎との再戦を誓った。

四　忍び、学園に投下される（前書き）

セカンド幼なじみの話は侍の回想として書くので早くも二巻に行きます。

四　忍び、学園に投下される

忍びＳｉｄｅ

「あと二分程でＩＳ学園の上空です」
「了解」
俺はそう答え装備の最終点検を行う。
「間もなく、ＩＳ学園上空です」
「礼を言う。では、また何処かで」
「えぇ、その時、彼女くらい居なかったら承知しませんよ。私を振ったんですから」
「あぁ、ディニスが嫉妬するくらいの美人を捕まえるさ」
そう言い扉を開け、後ろ手でディニスに手を振り、外に飛び出す。
「やはりオペレーションメテオはこうでないと」
サーカス団員のガンダム乗りの台詞を言い雲を突き抜けていく。

侍Ｓｉｄｅ

キィイイン、キィイン
金属音が響き合うＩＳアリーナ。
白と蒼のＩＳがつばぜり合いを演じては離れまたぶつかるを繰り返している。
「まだまだぁ！」
「甘いよっ！」
云わずとも一夏と浩十郎が放課後の練習をしていた。
「敵に機動を読まれちゃ、撹乱の意味ないよ！」
「それくらい、分かってる！…っ！！」
一夏が何かに気付き上を向く。

「ん～、なぁんか落ちてくるねぇ」
浩十郎がハイパーセンサーで何かを確認する。
「……一夏ぁ、ちょうどその地点に落下してくるから気をつけて」
そう言い浩十郎は一夏から十メートル以上離れた。

忍びＳｉｄｅ

「ＩＳアリーナか、シールドが展開されてそうだな」
そう呟き、両腕部のみＩＳを展開する。
「烏丸」
『御意。』
右手に烏丸を持ち両手持ちで狙いを定める。
「外側からの攻撃には脆けりゃ良いが…」
そう呟き、落下地点に二三発打ち込む。
ハイパーセンサーで割れずに激突した事を確認し、ＩＳを戻しそのまま落下する。
まぁ、避けても良かったんだが、避けて木に引っ掛かるよりはシールドをぶち抜いて障害物のないアリーナに落下する方が見栄えが良い。
「誰か居たみたいだが…心配はないな」
そう納得し、落下を続ける。

侍Ｓｉｄｅ

一夏に向けてかシールドが展開されているの警戒してか先程まで一夏がいた地点に弾丸が地面に着弾した。
一夏は先程警戒させた為、その地点から離れていたため直撃はない。
「にしても、落下中の狙撃なのに全弾命中。もしＩＳを展開してい

たとしてもセシリア以上の狙撃手だねぇ」
「わ、私以上ですって!?」
「あぁ、超遠距離狙撃です。いくらハイパーセンサーがあろうとも落下しながら地上千数百メートルからの狙撃は出来るんですか？」
「浩、よく分かるわね」
「ハイパーセンサーでも視認ギリギリの距離ですよ。そのくらい有るでしょう」
もう一度、空を見ると高度三百メートルまで降下していた。…で、誰か分かった。
「……なぁにしてるのかなぁ？アイツ」
黒い衣裳で落下のスピードで靡く口元を隠すためにいつも身に付けている赤いマフラー。
そう考えていると、高度五十メートルでパラシュートを開き落下してくる。
が、何時も通り十メートルくらいでパラシュートを外し地面に落下、綺麗に着地し無傷。

忍びＳｉｄｅ

何だ、ちょうど良くアイツが居たのか。
ピリリリ
携帯が鳴りソレを取り出す。
「慶三魔、こちらは無事に着地した」
『はい、此方でも無事を確認しました。良い学園生活を』
「あぁ、パイロットに要望を聞き入れてもらい感謝すると再三伝えておいてくれ」
そう言い携帯を切り、外したパラシュートを回収し、本校舎一階総合事務受付に向かう事にする。粗方の地形はどっかの木に引っ掛かった時に場所確認の為に覚えておいた。

浩十郎は…まぁ、ツインテールの女が近くにいるし、案内してもらう事もないな。

恋人は一緒に居さしたほうが奴らの為と納得し、飛ぶ鳥、跡を濁さずの如く何もなかったかの様に去った。

四　忍び、学園に投下される（後書き）

次話でブロンドの貴公子が出てきます。
原作主体ですが黒ウサギは翌日に転校させます。

伍　忍び、貴公子と共に転入する（前書き）

フランスの貴公子が登場します。
ちなみにドイツの黒ウサギは五話か六話開いてから登場します。

伍　忍び、貴公子と共に転入する

「昨日は派手な登場をしたらしいな」
ホームルームまで時間があるため職員室の応接室の様な場所で織斑千冬教師と少し話している。
「ＩＳ学園への交通費が高いからな恩人に交通費まで出さすのは余り好きではないから手っ取り早くヘリから降下しただけの話だ」
「成る程、一応筋は通ってはいる。それと目上の人には敬語を使え。お前の知り合いは何も言わずに敬語だったが？」
「アイツは単に女性が苦手なので女性には敬語で話します。補足を言うと不意に接近されると十メートル程離れます」
そんな事を話していると予鈴が鳴った。
「よし！服部、一年一組に行くぞ、それとお前と同じく今日転校する男子がいる」
織斑先生の後ろから人が現れ織斑先生の横に立った。
「はじめまして、フランスから来ましたシャルル・デュノアです」
欧米人らしい金髪の少年がそう挨拶した。
「スイス代表候補生の服部慶三魔兼定だ。どう呼んでくれてもかまわない」
「では、行くぞ。遅れるな」
「了解した」「はい」

「服部、デュノアここで待っていろ。呼ばれたら来い」
「はい」「了解した」
織斑先生が中に入ると数秒後にパァンと何かを叩く音がした。いかりやさんでもここまで良い音させてないぞ。
「おい、入って来い」
呼ばれたの扉を開け中に入る。

その瞬間無音の沈黙が起きた。それもそうだろうＩＳを扱える男が二人から二倍の四人に増えたのだから。
「この二人が貴様等のクラスメイトになる。自己紹介しろ」
「スイスから来た、服部慶三魔兼定だ。口調は自覚しているが直すつもりはない。まぁ、よろしく頼む」
「フランスから来ました。シャルル・デュノアです。よろしくお願いします。」
デュノアの自己紹介が終わると無音の沈黙が十数秒続いた。
「…き」
「「き？」」
「きゃあああああああ！！！」
金切り声とはこれの事かと思えるキー音の高い声が響いた。比喩でも例えでもなく本気で窓ガラスが揺れた。
「転校生二人！！どっちも男子！」
「一人は守りたい系！一人は守られたい系！！」
「侍とは違う堅物系！」
おい、見た目で判断するな。これでも非がある時は謝るぞ。
「静かしないとＩＳかついでアリーナ十周させるぞ」
その瞬間、水を打った様に静かになる。まぁ、あんなもん担いで十周も走ったら死ぬぞ。女子は…デュノアもだな。
「…ん？どうしたの？」
視線に気付いたのかそう話し掛けてくる。
「いや、こっちの話だ」
「この後は直ぐに第二アリーナで二組と合同で模擬戦を行う。以上でＨＲを終了する。それと服部、デュノア。織斑と柳生に面倒見てもらえ」
「はい」
「了解」
その後、アイツと二言三言、話をし更衣室に向かった。

が、
「あっ、転校生発見！！しかも、織斑君と柳生君も一緒」
「皆、早く来て」
一瞬で他のクラスの女子に囲まれた。
「何だこの包囲網は？！」
まるで訓練された兵隊のような動きだ。……そういや、この学校はそういう事を学ぶんだったな。
「あははは、最初の頃は参ったよぉ。お陰で少し耐性付いたけど」
いや多分ソレはお前の彼女だろ。そういえば一組に居なかったなあのツインテール。他のクラスなのか
まず早く行くことにするか。二手に分かれたほうが早そうだな。
「浩十郎、更衣室って此処からこう行けば良いのか？」
「んぁ？あぁ、おい、まさか…」
「そう言うことだ。俺等が抜ければ少しは行きやすくなるだろ。デュノア、少し我慢してくれ」
そう言い、デュノアを右肩に担ぎ上げた。
「ちょ、服部君？」
「少し口閉じておけ舌噛むかもな」
そう言い、女子の固まりに突撃を仕掛ける。と、思わして左にジャンプし壁に張りつく。
「風魔忍術壁走り」
そう呟き、壁を駆けていく。
女子達は少し茫然としていたがすぐに気が付き追い掛け始める。
足の速さで何とか撒き、更衣室に到着した。
「服部君、早く降ろして」
「あぁ、悪い。…どうした？顔が赤いようだが風邪でも引いたか？」
デュノアの顔は熱でもあるのかと赤かった。

「あ、うん。大丈夫。ちょっとビックリしただけだから。何か忍者みたいで」
「いや、忍だし」
「え？」
「服部半蔵ていう有名な忍者の末裔が俺」
「へぇ、凄いんだね」
「まあな。さて、着替えるとするかデュノア」
「シャルルで良いよ」
「そうか。なら、俺の事も慶三で良い。親しい奴はそう呼ぶ」
「うん、分かった慶三」
……中性的な顔のせいか男の笑顔なのに可愛く見える。
その後、織斑と浩十郎がやってきた。
「慶三、囮になるんじゃなかったのか？」
どうやら撒いたせいで女子が全て浩十郎達の方に行ったらしい。
「気にするな。俺は気にしない」
伝説に乗るクローンさんを真似て応える。

伍　忍び、貴公子と共に転入する（後書き）

次回は戦闘描写がありますが期待しないで下さい。

陸　忍び、侍、対戦する（前書き）

セシリア&鈴ＶＳ山田先生の戦いまで大半原作どおりで唯一の違いが千冬さんの鈴への説得のネタが一夏で無くなったところです。理由は違いますが一夏に向け双天牙月を投げ付けてます。

陸　忍び、侍、対戦する

「さて、次。柳生、服部、お前等がやれ」
唖み合う二人を放って織斑先生が俺たちを指名する。
「え？僕達も山田先生とやれと？」
「馬鹿者、お前達二人を相手にさせたら山田先生の荷が重すぎる。二人でやれ」
それぐらい分かれとでも言いたい顔で説明する織斑先生。
…俺は理解していた。
「は、はい」「了解した」
了承と同時にＩＳを展開し、空に飛翔する。
少し遅れて浩十郎がやってくる。
「浩十郎、勉学にかまけて体力は落ちて無いだろうな？」
「だったら織斑先生のトレーニングを受けてみてよ。そんな事、言えなくなるよ」
「だと良いな。なぁ、黒影」
『御意。闇夜展開。』
鞘に納まった二対の小太刀が背中に現れた。
「では、始め！！」
「牽制、飛斬撃連」
飛ぶ斬撃が放たれる。
「…ふっ」
鼻で笑い、鞘から二本の小太刀を取出し振るい消し去る。
「俺を侮っているのか？伊達に１ヶ月スイスで過ごしては居らぬ」
小太刀を鞘に収める。浩十郎は少し笑みを浮かべ
「だろうと思ってたよ。なら行こうか」
そう言い抜刀の構えから、突撃する。
「そう来なくては」
刀に手を掛け、真っ正面から挑む。

外野Ｓｉｄｅ

「…凄い、浩十郎が強いって言うのも分かる」
「あぁ、箒ですら。防ぐの精一杯の攻撃をしかも小太刀で…」
全員が唖然としてみていた。
なぜなら剣道の全国大会を優勝した箒ですら浩十郎の攻撃を防ぐの精一杯だったのにあろう事かそれを避け攻撃を返しているのだから…
青と黒のぶつかり合い、離れてはぶつかり、離れてはぶつかりを繰り返している。まるで踊るかのごとく

侍Ｓｉｄｅ

「ふっ、腕は衰えていないようだな」
「僕を舐めてるの？」
「いや、てっきりあのツインテールの女子と遊んでいたのかなと。
また、特殊技能を発動さしたのか？」
「っ！？…み、見ていたの？」
「お前が女と仲良くなるきっかけなどそのくらいだろ？また、人の女とったのか？」
皮肉を込めてそう尋ねる。
「慶三ぉ、言って良いことと悪い事があるよ」
言葉に刺が出てきた。ほぅ、少しは気にしていたのか。
「ま、大体誰のだったかは見当はつく。織斑だろ？」
「まぁ、ね」
「また泣かすなよ。あの時と同じみたいに」
「僕だって成長するんだよ」
そんな会話をしていても打ち合いは続いていた。

「ふっ、そうだな。なら、いい加減これも避けられるだろう？」
後ろに下がり距離をとり黒鴉を放つ。
「鳥葬に遭うが良い」
浩十郎に向け、飛ばす。
「ミサイル発射！」
後方より発射されたミサイルが左右からこちらに向かってくる。
「ふっ、こざかしい」
向かわしていた黒鴉を使いミサイルを切り裂いていく。が、切り裂き損ねたミサイルが迫ってくる
「想定内だ」
苦無を取出し投げつける。
苦無はミサイルに直撃し十数メートルほど先で爆発した。
爆煙で浩十郎が見えなくなったので黒鴉を呼び戻し、煙が晴れるまで様子を伺う。
『警告。敵、ビーム砲を展開。』
「っ！？」
警告の言い終わりからコンマ一秒くらいで二本のビームが飛んできた。
少し遅れて盾を生み出し、１つは盾で防ぎきるも、もう一つは擦ってしまいシールドエネルギーが百近く減る。
「……黒翼、展開」
背中の翼が開き黒い粒子が噴出され始める。
「黒鴉」
四匹が外れ、浩十郎へと向かう。
「さて、親ガラスも向かうか」
鞘から小太刀を抜き、ビーム刃を展開し太刀サイズまで延長し、爆煙の中を突き進む。
煙を抜けると俺よりも上に居た。ビーム砲を構えて…
「じゃあねぇ」
いつもの軽い口調で放たれるビーム、それは俺に当たる前に消えた。

いや、吸収された。
百近く減ったシールドエネルギーはビーム刃展開により減ってはいたが吸収したビームで展開前＋５０近くまで回復した。
「こっちから行くぞ」
黒鴉を浩十郎に突撃させるが全て叩き落とされる。がその隙に近づき刃を突き立てる。
「っと！隙にはさせないよぉ」
浩十郎は反応を示し小太刀で防ぐも少し遅くシールドエネルギーが少し削られる。
「くっ、まだまだぁ！！」
浩十郎は太刀と小太刀を構えなおし神経を研ぎ澄ましはじめた。
長期戦になると予想できたのでビーム刃を消し小太刀二本で迎え撃つ。
「せいやぁ！」
「ふんっ！」
キィイイン、キィイン
打ち合いは続き何時も通りの決着を付けることにする。
「忍型小太刀二刀流奥義」「柳生流抜刀剣術奥義」
浩十郎は小太刀を戻し砲撃形態で抜刀の構えになる。
「瞬天黒影斬！」「昇天蒼跡斬！」
二人がその場で消え、真逆の立ち位置に立っていた。
「負け、か」
浩十郎がそう呟く、その言葉を聞きふっ、と笑い訂正する。
「いや、相討ちだ」
こちらの表示もシールドエネルギーが０を表示している。

「よし、では専用機持ちは、織斑、オルコット、デュノア、服部、柳生、凰だな。六、七人のグループになって別れろ。各グループリーダーは専用機持ちがやること。では分かれろ」

織斑先生がそう言い終えるのと同時ぐらいの勢いで俺と服部、シャルル、一夏のまわりに女子が集まりだす。
つうかキャッキャ、キャッキャとうるさすぎて何言ってるのか分からない。
「この馬鹿者どもが……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！次もたつくようならＩＳを背負ってグラウンド十周させるぞ！」
鬼教官の言葉というものはこの道、数ヶ月の生徒にさえ怖がらす事の出来る迫力を持っているのだろう。
さっきまでのムクドリの集団合唱のような声は無くなり山へと飛び立ったかのように静かになり数十秒でグループができた。
「最初からそうしろ馬鹿者どもが」
やれやれとでも言いたいのか織斑先生は額に手を当て首を振っていた。
取り敢えず、いつもやってるスパルタ方法はしないでおくか…したらしたで織斑先生に怒られそうだしな。
その後、ちゃっちゃとグループメンバーに教えていくが二人目がＩＳから降りようとすると何故か他のメンバーがある一点を見ていた。
何だ？と思いその目線の先を追うと…お姫様抱っこをしメンバーをＩＳに乗せようとする一夏の光景があった。

「…一つ言っておく、わざとあぁなりたくて立ったままにしたら織斑式お仕置きを実行する場合もあるから覚悟しておけ」

そうグループメンバーに聞こえるように呟くと、頭を無言で上下に振る残りのメンバー。
授業終了後の更衣室でシャルルと浩十郎と一緒に一夏に屋上での昼食を誘われた。勿論断る理由もなく即効で快諾した。

昼休みの屋上、居るのは俺、浩十郎、一夏、シャルル、オルコット、

凰、篠ノ乃の七人
「……どういうことだ？」
「ん？」
何かしら不機嫌な篠ノ乃箒。
「大勢で食ったほうがうまいだろ。それにシャルルや慶三は転校してきたばかりで右も左も分からないだろうし」
「そ、それはそうだが…」
……成る程、何となく理解できた。篠ノ乃が不機嫌な理由つまり、一夏と二人きりで食べたかったのだが…それを理解できなかった一夏が俺たちを呼んでしまったと
「…俺はこの場に居ていいものか」
「いやいや、男子同士仲良くしようぜ」
「いや、そういう問題ではなくてだな」
そう言い浩十郎を見る。
気にするなとでも言いたいような身振りをする。
「そういうものか…」
そう呟き弁当箱を開け飯を食べる。
「うわぁ、これって自分で作ったの？」
「あぁ、人が居ない時間を見計らって…そのせいか普遍的なものしか出来なかったがな」
「これが普遍的、か」
篠ノ乃が自分と俺の弁当を見比べ少し落ち込んだように呟いた。
「気にする事はない。見た目や味も大事だが、重要なのは誰かに喜んでもらう為に作ったという事だ。俺の弁当は自分が食べるために作ったものだから誰かに食べてもらおうと思って作ったわけではない。なので勝手に食って不評されても俺は受け付けない」
「なら、食べても良いかな？」
売店のおにぎりだけでは足りなかったのかシャルルがそう聞いてくる。
「別に良いぞ、久々に作ったせいか無駄に作りすぎたからな」

まあ、元々は浩十郎に食わして料理の腕の差を見せ付けて泣かすのが目的だったのだが…確か鈴って呼ばれてるんだったな。そいつの前で恥かかす程俺も悪ではない。
「うわぁ、これとても美味しいよ」
本当に美味しそうに食べるシャルル。
「そうか？俺としては普通くらいなんだがな。」
「うん、とても美味しいよ。何で料理できるの？」
「いや、ウチの母親、料理作らすと黒魔術の儀式で使う壺の中身みたいなもんつくるし、おまけにウチにいる馬鹿くノ一どもは料理作る気サラッサラ無いし、で仕方なく俺が作ってたら無駄に上手くなった」
「良く言うよ、ハーレム天国の住人のクセして」
おい、今のはカチィンときましたよ。
「あれは天国の名を借りた地獄だ。良いよな普遍的な世界の住人で、お前があそこの住人なら気絶してるぞ」
「どういうこと？」
シャルル、食い付かなくて良いんだぞ
「ウチの馬鹿くノ一どもは料理を作らないし、帰って来ればそこら辺に自分達の忍装束脱ぎ散らかして、俺にその片付けを強制して洗濯さしたり、酒が切れたと買いに行かしたり…ウチの馬鹿くノ一どもは羞恥心の欠片すらねえし行動がおっさんなんだよ。そのクセして男が出来たら女ぶるし…」
あぁ、思い出しただけでイライラしてきた。「どっちにしろお前はハーレム天国の住人だろ」
「だったら、二三日変われよ。そしてやつれろ。俺にとっての地獄はお前にとっても地獄だろ？女子恐怖症のクセして」
「え？そうなの」
凰が驚いたように浩十郎の顔を見て尋ねる。
「あぁ、ソイツ男しかいない真剣道場で過ごしていたせいで女に苦手意識持っててな。女子と話す時は例え彼女だろうと敬語、不意に

近づかれるとそいつから１０メートル離れるんだ」
「……ぁあっ！だから後ろから抱きついたら振り払って逃げたのね」
鳳が納得したかの様に表情を輝かせる。
「…おい、いくら何でもそこは自重しろよ」
いくら不意にしろ彼女振り払うなよ
「あはは…いきなりだったから、つい」
こいつ、一発殴りてぇ…
途中から食べさせ合いが始まったが俺の知る由でもないので気にしない事にした。
鳳と浩十郎はそれなりに仲良くやっていた。
まあ、シャルルはそういう事には興味ないのか俺に了承を得ては俺のおかずを食べていった。

午後の授業も終わり、放課後一旦自室に戻り浩十郎の部屋へと向かった。…つうか、なぜアイツは一人部屋なのだ？一回シバきたい。

陸　忍び、侍、対戦する（後書き）

次話からは一巻の後半です。厳密には次話は鈴が登場するまでです。

漆　侍、セカンド幼なじみとの出会い（前書き）

謝罪です。何故か執筆したのを保存しようとしたら何回もエラーがでてしまったので翌日投稿となりました。
タイトル通り中国娘が登場しますが思い切り最後です。

漆　侍、セカンド幼なじみとの出会い

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、柳生、オルコット。試しに飛んでみせろ」
四月も下旬、僕がこの世界に来て二週間は過ぎようとしていた。
取り敢えず、織斑先生の言葉に従いＩＳを展開する。
「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」
右を見ると一夏がまだ展開できずにいた。
少しするとイメージしやすいポーズが出来たらしく、白式を展開した。
「よし、飛べ」
ブーストを点火し急上昇する。
「何をやっている。スペック上の出力はブルー・ティアーズより白式の方が上だぞ」
また怒られてるよ。
「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」
「そう言われてももなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」
「反重力力翼と流動波干渉の話になりますが」
「わかった。説明してくれなくていい」
参考書に書いてあったよ。あの電話帳サイズに
「織斑、柳生、オルコット。急下降と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」
「了解です。では、お先に」
誰に言ったかは聞かなくても分かるけど織斑先生の指示の後セシリアさんは地上に降下し、難なくクリアした。
「上手いもんだなぁ」
「そりゃ代表候補生なんだし、これくらい出来なきゃね。じゃ、先

行くね」
そう言い、自由落下とブースター出力で落下し、目測三メートルで逆噴射をし急停止し誤差＋二センチで止まる。
「まっ、こんなものかな」
そう呟き空を見上げると…白き流れ星が迫ってきていた。
「……ん？」
それから二分程記憶が飛び気が付くと一夏が上に乗っかっていた。
「…一夏、取り敢えず退いてくれないか？」
「あぁ、すまん」
蒼跡のおかげか、地上にクレーターが出来るほどの速度で落下したものを真っ正面で受けたのに気絶だけで済んだのは。

「では、織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになっただろ」
「は、はい」
一夏は返事をすると先程の展開するときのポーズになる。
数秒し右手に雪片弐型が握られる。
「遅い。０．５秒で出せるようになれ」
「セシリア、武装を展開しろ」
「はい」
セシリアさんは返事をし、左手を真横に突き出すと一瞬にしてスターライトｍｋ？が現れた。
「さすがだな、代表候補生。しかし、その構えは直せ。何処を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」
「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な…」
「直せ。いいな」
「……はい」
「柳生、中距離射撃武器を片手に展開しろ」
片手ね。ミサイルは違うから…サブマシンガンだね。

「さすがだ。展開速度、武装選択ともに申し分ない。では、セシリア、近接用武装を展開しろ」
「えっ。あ、はっ、はいっ」
何か考えていたみたいでセシリアさんはいきなり振られた会話にビックリしたみたい
狙撃銃を収納し近接用武装を展開しようとするがなかなか現れない。
「まだか？」
「す、すぐです。あぁ、もうっ！インターセプター！」
半ばヤケクソ気味に武装名を叫ぶと武器が展開される。かなり悔しそうな顔をするセシリアさん。
「どれくらいかかっている。実戦でも相手に待ってもらうのか？」
「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！」
「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懐に入られたように見えたが？」
「あ、あれは、その…」
ごにょごにょとまごつくセシリアさんを僕と一夏は眺めていると一夏の視線に気付いたのかセシリアさんは一夏をキッと睨んだ。
「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ。柳生、手伝うなよ」
成る程ぉ、そう言われたら手伝えないねぇ（笑）

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「……？」
何？この空気は？
クラスメイトの布仏本音（のほほん）さんを筆頭とする三人組に呼ばれたから来てみたけど、何か周りのテンションが上がる毎に一夏のテンションがガタ落ちしてる気が…
「一夏、これ何なの？」
「俺がクラス代表就任パーティだ」

「そんなに嫌な事なの？」
「浩十郎が来る前のことなんだけどな。クラス代表を決める時にセシリアと少しいざこざがあって決闘する事になってな。まぁ、結果を云えば俺の負けでセシリアが代表の筈なんだけど、セシリアが代表を譲ると言ってきたんだ。まあ、決闘する事になったんだけど俺は元からなる気なかったのにクラスの女子が推薦して…」
要約すると、なりたくなかったんだけど色々あってやる事になったと…「なあ、俺どうしたら良いんだ？」
「……まあ、クラスの期待に沿えるよう頑張れば？」
「はいはーい、新聞部でぇす。話題の新入生、織斑一夏君と柳生浩十郎君に特別インタビューに来ましたぁ！」
へぇ…ん？僕も？
「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。はいこれ名刺」
渡された名刺を見る…黛、これ何時使うんだろ？
「では、織斑君！クラス代表になった感想は？」
「えぇっと、まあ、頑張ります」
「もっといいコメント頂戴よぉ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」
「それ、感想じゃないですよね？どう聞いても」
「まぁ、良いよ。適当に捏造するから。では、柳生君、次いってみようか！同じ男子として一言！」
……
「え、っと…対戦相手を泣かさないでね」
「うーん、良いと思うけどまぁ、こっちで改竄しとくね」
……ぐすん
「じゃあ、セシリアちゃん、いってみようか！」
「わ、わたくし、こういうコメントは余り好きではありませんが…仕方ないですわね」
そう一息置き
「コホン。ではまず、私がどうしてクラス代表を辞退したかと――」
「あぁ、長くなりそうだから適当に捏造しとくね」

「さ、最後まで聞きなさい！」
大丈夫か？新聞部、三流新聞記者でももっとまともな取材をすると思うよ。
「じゃ、最後に専用機持ち三人の写真撮っちゃうから三人とも並んで並んでぇ」
黛先輩に言われ言われたとおりに並ぶ。並び方は黛先輩から見て右からセシリアさん、一夏、僕。
「じゃあ、撮るよぉ。３５×５１÷２４は～？」
「……２？」
「ぶー、７４，３７５でしたー」
「ネタ？」
パシャッ
「…何で全員入ってるんだ？」
そう言われ、周りを見ると…あの一瞬で周りに一組総メンバーが、何という行動力、いや統率力。
「良いじゃん、良いじゃん」
「クラスの思い出になるしねー」
「ねー」
さすが女子、団結力が半端ない

パーティは十時まで続いたがさすが女子力、あれほど騒いでいるのに疲れた顔一つ無い。
僕は部屋に戻ると早々にベッドに潜り込み眠ることにした。

翌日

「柳生くん、おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」
昨日のパーティの疲労は取れたらしく爽快な気分で教室に入り席に着くと先程まで一夏と話していたクラスメイトに話し掛けられた。
「転校生？僕が言うのも何ですけど今の時期にですか」

クラスメイトの大半が女子と云えどこの敬語は治りそうにありません。
「そう、なんでも中国の代表候補生なんだって」
「へぇ」
「あら、わたくしの存在を今更危ぶんでの転入かしら」
さすが絵に書いたようなお嬢様、腰に手を当てたポーズが様になっている。
「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」
あれ箒さん、ほんの数秒前までたしか自分の席にいたはずだけど…
「それよりも一夏、来月にはクラス対抗戦があるのに大丈夫なのか？」
「そうですわ、一夏さん。ですからクラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが努めさしていただきますわ」
「まあ、取り敢えず対遠距離戦はセシリアさんに任せて、対近接戦闘は僕が、箒さんは剣道で一夏の腕を戻して」
「まぁ、それが得策ですわね」
「わ、私は…」
「打鉄の許可が取れたら変わって上げるし、僕も色々と忙しいから箒さんに代理を務めてもらうこともあるから」
一夏に聞こえないように告げるとホッとしたのか
「う、む。それなら…」
少し顔をほころばした。
「それで、駄目なら少しお仕置きでもしようかな？」
「ま、まあ。やれるだけやってみるさ」
「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝ってもらわないと！」
「そうだぞ。男たるもの勝つ気でいかなくてどうする」
「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ」
「フリーパスのためにも頑張ってね」

「今のところ専用機持ちがクラス代表は一組と四組だけだから、余裕だよ」
「その情報、古いよ」
教室の入り口側から声が聞こえた。振り返ると腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかるツインテールの女の子がいた。
「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないよ」
「鈴…？お前、鈴か？」
え？一夏の知り合いなの
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
そう、これが出会いだった。

回想終了

「おい、お前の話は何時聞いても無駄に長い。取り敢えず温故知新に纏めろ」
いきなり人の話の腰を折るねぇ
「慶三、激しく間違ってる。起承転結だ」
「良いから、続き聞かせろ。こっちだって暇ではないんだ」
「慶三、君が聞きたいからって人の部屋に入り込んできたんじゃなかったっけ？」
僕はそう記憶している。
「取り敢えず、聞かせろ。どうして特殊技能発動するまで到ったかを」
はいはい、話しますよ。話せば良いんでしょ。女装趣味さん
「ん？何か言ったか？」
「ううん、別に」

漆　侍、セカンド幼なじみとの出会い（後書き）

次回は侍がある力を発動させちゃいます。

捌　侍、特殊技能発動する（前書き）

少し口調に不安がありますがまぁ、見ていってください。

捌　侍、特殊技能発動する

回想再開

「鈴…？お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
ふっと小さく笑みをこぼすツインテールの女の子。
「何格好付けてるんだ？すげえ似合わねえぞ」
「なっ…！？なんてこと言うのよ、アンタは！」
あれ、何か親しみやすくなった。あれ？後ろに…
「おい」
「なによ？」
バシンッ！
痛そうな音響くねぇ。その出席簿
「もうＳＨＲの時間だ」
「ゲッ、千冬さん」
「そう嫌そうな声を出すな。それと織斑先生と呼べ。そしてさっさと自分のクラスに戻れ。邪魔だ」
「す、すみません。また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」
「さっさと戻れ」
「は、はいっ！」
最初の気取った感が何処へやらといったかんじに二組へ向かって猛ダッシュ。
「っていうかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」
「一夏、さっきの女子知り合いなの？」
ふと、思った疑問を尋ねてみた。
「えらく親しそうだったな？一夏」
「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で――」

箒さん、セシリアさんと続きその他にも質問が為されたため一夏には聞き流された。
バシンバシンバシンッ！
「席に着け」
そういえば織斑先生が居たこと忘れてた。
そして今日も授業が始まる

「お前のせいだ！」
「貴方のせいですわ！」
昼休みに入り一夏を昼食に誘おうと近づくと箒さんとセシリアさんが一夏に文句を言っていた。
「なんでたよ…」
多分、山田先生に計五回注意され織斑先生に計三回叩かれた事に対するものと思うよ。
「話なら飯食いながら聞くから。浩十郎も行こうぜ」
「うん、分かった」
こちらから誘うつもりだったし
僕達、四人とその他クラスメイト数名が付いてきて、学食に移動した。

学食に到着し券売機でざる蕎麦を購入し受付へと持っていく。
因みに一夏は日替わりランチ、箒さんはきつねうどん、セシリアさんは洋食ランチを買っていた。
「待ってたわよ、一夏！」
ドーンと効果音が鳴りそうな登場をした、えっと…凰鈴音さん。まぁ、その前に…
「通行の邪魔なので退いてもらえませんか？」
「え、悪いわね……って男？！」
……気付いてなかったのね。

「あの、柳生浩十郎と言います。ご存知…無いですかね？」
「そういえば、もう一人ＩＳの操縦が出来る男が居るって…すっかり忘れてたわ」
そうですか。
「…それよりラーメンのびるぞ」
一夏が凰さんが持っているラーメンを見ながら言う。
「わ、わかってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！なんで早く来ないのよ！」
それが出来たらエスパーですよ凰さん。
「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年になるのか。元気にしてたか？」
「元気にしてたわよ。アンタの方はどうなのよ？」
「ここ一年は無遅刻無欠席だ」
「あー、ゴホンゴホン」
「ンンッ！い、一夏さん？注文の品が出来てましてよ」
一夏と自分達の知らない女子が話すのは気に入らないらしく、わざと大袈裟に咳き込む箒さんとセシリアさん。
あっ、僕のも出来たみたい。
「向こうのテーブルが空いてるみたいなので行きましょう」
少し不機嫌気味の箒さんとセシリアさんにも気付いてもらえるように大きめに声を掛けた。
テーブルに着くと一夏はまた凰さんと話をはじめた。
「にしても、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつの間に代表候補生になったんだ？」
「質問ばっかりしないでよ。アンタこそ、何でＩＳ使ってるの？」
「まぁ、いろいろあってな…」
このままだと話が聞け無さそうだなぁ
「ねぇ、一夏。その人とどういう関係なの？」
僕がそう尋ねると箒さんとセシリアさんは追撃とばかりに
「そうだぞ一夏、どういう関係なのだ？」

「ま、まさか付き合ってらっしゃるのですか？」
そう尋ねてきた。ほかに聞き耳を立てていたクラスメイト達も興味津々に頷く。「べ、別に付き合ってるわけじゃ…」
「そうだぞ。ただの幼なじみだ」
「幼なじみ…？」
怪訝そうな声で聞き返す箒さん。
「…あぁ、箒は知らないのか。えっとだな、箒が引っ越していったのが小四の終わりだろ？で、鈴が小五の頭に転校してきて中二の終わりに国に帰ったんだよ。で、鈴、こっちが箒。前に話した小学校からの幼なじみで、俺が通ってた剣術道場の娘」
「ふぅん、あなたが…初めまして。これからよろしくね」
「ああ。こちらこそ」
あぁ、一夏相関図に新たな人物関係が…
「ンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」
「…誰？」
「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？ご存じありませんか！？」
「ごめん。あたし、他の国とか興味ないし」
「な、な、なっ……！？」
怒りで顔を真っ赤にするセシリアさん。
そういえば、一夏と初めて話した時も一夏が代表候補生の文字すら知らなくてキレたって前に一夏が言ってたなぁ
「い、言っておきましけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」
「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。あたし強いもん」
嫌味っぽく聞こえない言い方だねぇ。まぁ、そのせいか箒さんは無言で箸を止め、セシリアさんはわなわなと拳を握り締め震えていた。
「そういえば、一夏。アンタ、クラスの代表になったんだって？」
「まぁ、成り行きで」

「ふぅん…なんなら、あたしがＩＳの操縦、見てあげても良いけど？」
「お、そりゃ助かっ」
ダンッ！
一夏の言葉を遮る様に同時にテーブルを叩かれる。
「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは私だ」
「あなたは二組でしょう？！敵の施しは受けませんわ」
「あたしは一夏に言ってんの。部外者引っ込んでいて」
僕は関係ありません。話し掛けたとしても煙たがれるだけだから話し掛けません
「そうだ、一夏。今日の放課後空いてる？久しぶりに駅前のファミレス行こう」
「あー、あそこ去年潰れたぞ。それに今日は浩十郎と模擬戦が」
「そうだぞ、それに私との特訓もあるのだ」
「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓は必要ですもの。ですから専用機持ちの私も参加しますわ」
蕎麦湯とか無いのかな？後で食堂のおばさんに聞こう
「じゃあ、それが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏」
あれ？話しもう終わったの？

放課後

何故か箒さんが打鉄を起動してアリーナに居たので予定を変更して僕の代わりに一夏の相手をさした。うん、やっぱり篠ノ乃流剣術の人にはやっぱりその師範代の人が扱かなければね…べ、別に面倒臭いから代わってもらったわけじゃないんだよ？うん、せっかく許可取ったんだからね？うん
で、一夏の特訓が終わったので自室で蒼輝のメンテ（出力の変更等）

をしていると隣から何か聞こえてきた。
「確か、一夏の部屋だよね?篠之乃さんと相部屋の…」
少し耳を傾けると箒さんと凰さんの言い争いだった。だったと言ってもまだ続いてるんだけどね
取り敢えず、そのまま聞いているとバチィンと何かを叩くような音が聞こえてきた。
何事かと思い、部屋を出て隣の部屋に行くとちょうどバッグを持ち外に出る凰さんと擦れ違った。目に涙を浮かべて
何があったのか聞くために一夏の部屋に入ると頬を押さえ呆然とする一夏と同じく呆然としつつ一夏に怒りを向ける箒さんがいた。
「どうかしたの?」
そう尋ね、一夏から話を聞く。
要約すると一夏と凰さんが昔約束した事を覚えていたまでは良いけどそれの意味を間違えていたという事みたい。
この人、怖ぁ。無自覚で人を恋に落として無自覚で傷付けるって
「しょうがないから。僕が慰めてくるよ。今度会ったらちゃんと謝るんだよ」
「あ、あぁ。悪ぃ」
「気にしなぁい。気にしない」
そう言い凰さんを探しに行った。
と言っても凰さんの部屋番は知らないので適当に探してたら学生寮近くの噴水のある広場に腰掛けていた。
そして近づき何気なく声を掛け、話を始めた。
少し顔を赤らめ去っていく凰さんを眺め重いため息を吐いた。
「……また、やってしまった」
言葉を選べば良かったのにぃ…
「…まぁ、なっちゃったんなら仕方ないし。一夏みたいに傷付けてないようにしよ」
雑華さんの二の舞はゴメンだしね。

回想終了

「何が二の舞だ。お前、あの時一夏状態だったじゃないか」
「うるさいなぁ。もう、良いよ。横からペチャクチャ言われたらこっちも話したくなくなるよ。もう話さないよぉだ」
「別に良いぞ。凰に話を聞きに行くだけだ」
「やあぁ！！それだけはやめてぇ！」
「なら、話せ。やれ、話せ。早くしないと、宗子が聞きに行ってしまうぞ」
「話すよぉ、話しますから。それだけはご勘弁願いますぅ」

捌　侍、特殊技能発動する（後書き）

次話は中国娘がブチ切れちゃいます。

玖　侍、剣士にキレかかる（前書き）

前回話したとおり鈴がブチ切れます。

玖　侍、剣士にキレかかる

五月。
あれから数週間がたったけど、一過性の風邪のように元に戻ってくれない凰さん。
それどころか一夏が謝っていないせいか日に日にストレス溜めまくってますよ的な顔になっていく。
まぁ、仕方ないと思う。僕に会いに来れば近くに一夏がいるのだから…
「一夏ぁ、早く謝ってよぉ。僕、このままじゃストレスで胃に穴が開いてしまうよ」
最初に謝れと言ったはずなんだけどなぁ…
「何でお前がストレス溜め込む結果になるんだ？」
「…一夏が傍にいると感情のオーラが不安定になるんだよ。凰さんの」
「なんでそこで鈴が出てくるんだ？」
コイツ、一回頭切開して思考回路を確認せねばならんな。
凰さんも可愛そうだなぁ、あの時の話から総合するに一夏は究極ド天然フラグ職人に立てられた被害者だし…僕が言えた義理ではないね。

放課後、一夏の特訓の為にアリーナに向かうとそこにはなんと凰さんがいた。
「待ってたわよ。一夏！」
あれ？昨日までの不機嫌さが全く無い。良かったぁ、これでストレス性胃潰瘍にならなくて済む
「待たした覚えはないんだが？」
おい。いい加減謝れ、ド天然

「で、一夏。反省した？」
「へ？なにが？」
「だ、か、らっ！あたしを怒らして申し訳なかったなぁとか！仲直りしたいなぁとか！色々あるでしょうがっ！」
凰さん、何とか我慢して待ってたんだなぁ。このままじゃダメだって。うん、片方が歩み寄ればもう片方も…
「いや、そう言われても…鈴が避けてたんじゃねえか」
「あんたねぇ…じゃあなに？女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」
「おう。なんか変か？」
きっぱり肯定する一夏、そして何か変かって…やっべ、殴りてぇ。
頭カチ割る威力で殴りてぇ
「変かって…あぁ、もうっ！謝りなさいよ！！」
ほら、謝れ。ここで謝ったら殴らないから。むしろ飴ちゃん付けるから
「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！」
「意味が違うのよ、約束の意味が！」
おいそこ、どう違うって疑問顔をするな
「アッタマきた！どうあっても謝らないっていう訳ね！？」
「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」
コイツ、何回乙女の純情踏み躙れば気が済むんだ？
「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが」
おいコラそこ、首傾げて？を浮かべるな
「じゃあ、こうしましょう！来週のクラス対抗戦。そこで、勝った方が負けた方に何でも一つ言うこと聞かせられるって事で良いわね！」
「おう、良いぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」
「せ、説明は、その…」
顔を赤くさせ少し顔を下に向ける凰さん。
よし、シバこう。今日は特訓の名を借りた篠ノ乃流シバきを実践し

よう
「なんだ?やめるならやめても良いぞ?」
挑発するなド天然
「だ、誰が止めるのよ!あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ!」
そして、挑発に乗るなお前も
「なんでだよ、馬鹿」
おい、言い過ぎ。
「馬鹿とは何よ馬鹿とは!この朴念仁!間抜け!阿呆!馬鹿はアンタよ!」
凰さん、あなたも言い過ぎ。
「うるさい、貧乳」
おい、それは最大級に言いすドガァァッ!!……な、何?
心の突っ込みが終わる前に何かが爆発するような音が響いた。見ると、凰さんの右腕全体はＩＳ装甲に包まれていた。
「い、言ったわね…言ってはならないこと……言ったわね!!」
余りの怒気に凰さんの後ろに龍の幻影が見えた。逆鱗に触れられたような怒り狂った龍が…
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった」
違う。今のも、だ
「今の、は!?今のもよ!いつだってアンタが悪いのよ!」
「謝ってくれれば、今までのも全部水に流して心機一転できると思ったのに…っ!
僕を一瞬見た後一夏をキッと睨み付け、
全力で殺す気でいくから覚悟しなさい!!せいぜい私にした仕打ちを泣いてお詫びするが良いわ!!!」
最後の言葉に呪咀の念を込めていたのか不気味な悪寒を背中に感じながら、アリーナから出ていく凰さんを見送った。
「…パワータイプの様ですわね。それも近接格闘型の…」
オルコットさんが先程の音の産物を眺めながら呟いた。それはアリ

ーナの壁に半円の凹みを残していた。
「一夏、勝っても負けてもどっちにしろ謝りなさいな。ソレしか道はない」
「…そうするよ」
「よし、なら特訓しようか？」
「あ、あぁ。……浩十郎？その不気味な笑みはなんなんだ？」
「ん？気のせいだよ。何言ってるの？僕の笑みはこんなんだよ」
ほら、こんなにニッコリ顔だよ。
「いや、さっきの鈴が乗り移ったような…」
「独り言言ってないでさっさと展開しろコラ♪今日は修羅対策を勉強させるからな」
今日は徹底的に扱く！飴さえハバネロ混入する勢いで！

玖　侍、剣士にキレかかる（後書き）

次回は一巻の最後です。ついでにハーレムメンバーが一人離脱します。

拾　侍、名前で呼ぶ（前書き）

鈴の喋り方はこれで宜しいのか解りませんけど…まぁ、読んでください。

拾　侍、名前で呼ぶ

試合当日

幸か不幸か第一回戦初戦の対決は一夏と凰さんであった。

「……」

さて、僕はどちらを応援いたしましょうか。

個人的には凰さんに勝ってほしい。理由は簡単、女泣かす奴は死ぬが良い。

だけど隣の篠ノ乃さんやオルコットさん、周りのクラスメイト女子は一夏側だろう。何故なら、優勝商品は学食デザートの無料パスなのだから。あるアニメのオープニングで女の子はお菓子が主食と歌われるほど大好きなんだから。まあ、前述の二人は違う理由なんだけど…

まあ、現在の戦況上圧倒的に一夏が不利。接近戦なら互角だけど…問題は凰さんのＩＳ『甲龍（シェンロン）』の射撃武器『衝撃砲』だ。

何故なら砲身も砲弾も見えないのだから躱しようが無い。

僕も初見だったらまともに何発も食らっていたはず…ましてや、実践訓練の余り無い一夏だ。初見でそれを躱し接近する事が出来るものか…

…伊達に織斑先生の弟を生まれてからやってはいなかった。

攻撃は最大の防御とは良く言ったもの。射撃武器の特性はその攻撃範囲、だけど動く的には狙いを付けにくい、それに相手が動きだしてから引き金を引いては僅かにタイムロスがある。それが突然で素早いものなら相手は意表を衝かれタイムロスは長くなる。

一夏はそれを考えてかそれともただ衝撃砲が放たれる前に攻撃を仕

掛けたかっただけかいずれにしよ一夏は突発的に瞬時加速を使用し、尚且つ一夏のＩＳ『白式』の単一仕様能力雪片弐型を展開し斬り掛かった。
が、それは失敗した。
凰さんの反撃、ではなく空からの乱入者により…
ズドオォォッ！！
雪片が凰さんに当たるかどうかに轟音がなったため一夏は動きを止めその音の方向を見た。
アリーナ中央より黒い煙が立ち上っていた。
そこから一夏達に向け赤いビームが放たれるが二人は何とか躱す。
今度はビームのマシンガンが放たれると煙か晴れその正体が露になった。
グリーンのバイザーとＶ字アンテナが特徴的なヘルメットのような頭部装甲、二対の金色に塗装された排熱機構を有する胸部、金色に輝く砲口が見える腹部、三門一組のガトリング砲と手の平に小型の砲口が存在する腕部、金属感のある六対の羽を背中に持つ全身装甲の黒いＩＳであった。
「…ごちゃ混ぜガンダム」
だけど火力は高そうだ。一夏と凰さんだけで勝てるかな？
「…蒼跡、アリーナに出たい。ナビを頼める？」
『はい、私はマスターと共にあります。学園内のセキュリティネットワークにハッキングし最短距離でご案内します。』
「ありがとう」
そう言い観客席の出口へ向かった。

一夏Ｓｉｄｅ

「っく…またダメか」
三回目の失敗、次がラストとなりうるシールド残量だった。
鈴が敵のスキを作り、そこに一夏が攻め込む。

しかし敵の頭部は鈴の方を向いているのにも構わず、まるですべて見えてるとでも言いたいのか、その攻撃を難なく避け重火器で武装した腕で裏拳を食らわし、余った腕のガトリングを数発打ち込む。
まるでしつこく泣き付く子供をあしらうか如く。
「一夏っ、離脱！」
衝撃砲で敵を撃ちながら一夏に向かって叫ぶ。
「あ、あぁ！」
一夏は敵が鈴に腹部の砲口から砲撃を行ってる隙に離脱する。
「サンキューな」
「礼言うくらいなら当てなさいよ！」
「当てようとしてるっつぅの！……なぁ、アイツ何か攻撃がワンパターンすぎないか？」
「一夏もね。けど確かに他に攻撃手段ならいくらでもありそうなのに。」
「なんつーか、機械じみてる。プログラムされてるみたいに」
「は？人が乗らなきゃＩＳは動かな…そう言えばアレ。さっきからあたしたちが会話してるときあんまり攻撃してこないわね」
たまに牽制的に数発放つも全く攻撃してこない。
「でもあり得ない。ＩＳは人が乗らないと動かない。そういうものだもの」
鈴はそう言い、敵を見た。やはり二人を見てはいるが攻撃してこない。
『もう、面倒なのでぶっ壊しちゃいましょう！マスター行きますよお！！』
いきなりスピーカーから女性の声が聞こえてきた。次の瞬間、二人から見て右側のピットから煙が上がりそこから何かが飛び出してきた。
青と白の装甲、ＩＳ腰部にマウントされた長短二本の刀。その操縦者は…
「「浩十郎！！」」

「二人とも下がってて僕が相手するから」
「何言ってるんだ?!お前一人で倒せるのかよ?」
「そうよ!!あたしも戦うわ!」
「一対一、侍として基本の戦い方だ。侍の真剣勝負、邪魔立て無用」
いつもの親しみやすい喋り方ではなく堅い口調で話す浩十郎
「おぬし等に援護される程、蒼跡と俺は若輩者ではない」
「「!!」」

三人称Ｓｉｄｅ

「…分かったよ。浩十郎、コイツ無人機みたいだぞ」
「へぇ、絡繰り兵器。結構結構、切り刻んでも良いって事だな?蒼跡」
『了ぉ解っ♪リミッター解除。限界能力(リミットアビリティ)、陽炎(かげろう)展開』
先程の女性の声が聞こえると蒼跡の青と白のカラーリングが赤と橙色へと変化した。
『システム制御、限界時間五分。』
「上等上等。蒼跡、殲滅に迎う」
蒼跡はゆっくりと敵に向かい始めた。
「僕の友達傷付けた事を後悔してね」
抜刀の構えを取り、接近する。
「抜刀壱ノ太刀」
チィン
納刀音が響き敵のシールドを切り裂かれ胸の装甲に横一閃の傷が付く。敵はすかさず腹部の砲口から砲撃を行うがその場に蒼跡は居ない。
一瞬敵の左側がぼやけ蒼跡が現れる。
「抜刀弐ノ太刀」
チィン

また納刀音が響き敵の左腕の肘に光が走り、その先が地面に落ちる。
今度は右腕を振るうもそこにはもう居らず敵の正面で抜刀の構えを取っていた。
「抜刀、鬼狩り七段滅多切り」
チィン
納刀音が響くと敵の身体に斬撃が大量に刻まれ機能停止したのか敵は地に伏した。
「斬滅完了。なぁんてね」
浩十郎はいつもの口調でそう言い空にいる二人に笑いかけた。
『限界能力陽炎解除、フルパワーの反動で一定時間絶対防御が作動されなくなります』
「了解っ、ふう」
息を吐くと赤と橙に染まった機体は元の青と白のカラーリングに戻った。

侍Ｓｉｄｅ

「浩十郎！」
誰かが呼ぶ声がしたのでその方向を見ると凰さんが近づいてきた。
僕はそれに苦笑いをした。
『警告、敵機再起動を確認！』
「凰っ！止まれ！」
「え？…っ！」
敵機は背部から砲頭を展開し砲撃した。
…僕じゃない？…狙いは凰さん！？くそっ
「瞬間移動！！」
一瞬で凰さんに接近し、吹き飛ばす。その瞬間、赤い砲撃が僕を飲み込み意識をかき消した。

目を覚ますとカーテンで仕切られた一室だった。どうやら保健室みたい。
「気が付いたか」
シャッとカーテンが引かれ織斑先生が入ってくる。
「ＩＳの保護機能のおかげか、お前のＩＳの高性能さのおかげか…何れにしろ絶対防御が皆無状態の直撃だったが軽い打撲程度で済んだ。まあ、無断で介入した罰則はそれで帳消しでよかろう」
そうしてくれて助かります、織斑先生。
「そうですか。それであの機体は？」
「お前を撃った衝撃で機能が完全に停止した。今は学園の研究室で調査中だ。では、私はまだ後片付けがあるので仕事に戻る。お前も少し休んだら部屋に戻っていいぞ」
用件を言い終えたのか織斑先生はあっさり帰っていった。
その様子を眺めていると眠気が襲ってきたので少し眠る事にした。

意識が回復すると顔の近くに人の気配を感じた。うん、すんごく近くに…少し恐怖だったので目を開けずにそのままにしておくと左頬に何かが当たる感覚がした。
その正体を確認するため目を開けると…凰さんだった……ついでに目が合った。
凰さんの顔が徐々に赤くなっていき、真っ赤になると一瞬で僕の寝ているベッドから三メートルほど離れた。
「えっと、その……ごめん。あたしのせいでこんな事になって」
「気にしなくて良いですよ。気を抜いて、ちゃんと確認しなかった僕にも責任がありますから」
また修業のし直しをしないといけないね。集中力が切れやすい、これ僕の欠点。
「そんな事は無いっ。あたしも気を抜いてて浩十郎に近付こうしたから…」

自分が情けない様で凰さんはポロポロと涙を流しはじめた。
「だから本当に大丈夫ですから怪我したと言いましても重傷というわけでもないですから」
「でも、でもっ…」
これじゃ何時までたっても終らなさそうだなぁ「凰さん、泣いたら可愛い顔が台無しですよ。いつもの元気な凰さんの方が僕は好きですよ」
少し和ませるために言ったのだけど直ぐに後悔した。
何故なら彼女は僕に惚れていたのだから
「…あたしも浩十郎が好き、だから自分が許せない。初恋を終わらして浩十郎と新しい恋を始めようと思ったのにこれじゃあ始まる前に終っちゃう」
ぇ…
『今までの事を水に流して心機一転できると思ったのに』
…あの時の言葉ってそういう意味があったんだ。
「大丈夫だよ。僕はそんな事で人を嫌ったりしないから、それにそんな人間だったら誰かのために自分を犠牲にしないから」
「本当に?」
涙で濡れた顔でこちらを見る凰さん
「うん、でも僕で良いの?今みたいに君を泣かせることがあると思うけど…」
「大丈夫、そういうの一夏で慣れてるから」
さすがキングオブ唐変木
「それで肝心の一夏とは仲直りできたの?」
「そんな事してる暇あったら真っ先に浩十郎のところに居たわよ。ま、千冬さんが現れた時は大丈夫だと思って渋々離れたけど一夏と話してる程心に余裕無かったわ」
そこまで言われると溜め息吐く前に顔が赤くなっちゃうよ
「なら、今すぐ仲直りしてきなさい。僕と付き合いたいなら、ね」
「うっ…わ、分かったわよ。なら、仲直りしたらちゃんと約束守っ

てよね！」
人差し指をこちらに向け宣言する凰さん。
「大丈夫だよ。凰さん」
「…鈴音」
「え？」
「つ、付き合うんだから名字じゃなくて名前で若しくは鈴って呼びなさいよ」
頬を赤く染めた凰さん、いや鈴の顔が面白くてプッと吹く。
「わ、笑わないでよ！恥ずかしいじゃない…」
「はいはい。じゃあ、鈴」
「ふ、フフン。じゃ、数秒で戻ってくるからどっか行かないでよ！」
そう言い一夏のところへと走っていった。
やれやれ…ホント元気良すぎるね彼女は…

回想終了

「というわけだよ」
「Ｚｚｚ．．．．ん？あぁ、やっと終わったか」
「何時から寝てたの？」
「凰鈴音がブチ切れたくらいから」
「再開してほぼ最初じゃないか！」
「いや、俺としてはだ。そのくらいでだいたいの粗筋は解ったから寝てただけだ」
「そう。なら、さっさと戻ってくれない？」
「あぁ、そうしたいんだが…最後に一つ質問していいか？」
「なに？」
「シャルル・デュノアの第一印象を聞きたい。俺が知ってる中で男に敬語を使ったのはアイツが初めてだ」
「…え、そうだったの？女子と話すときも意識してないから分からなかった。…そうだね。イギリス紳士みたいだけど、シャルルを女

って言ったら…違和感ないね」
「そうか。お前の意見が聞けてよかった」
「慶三はどんな感じなの？」
「…女っぽいというのは俺も最初に感じた。ま、良いんじゃないか。十人十色だしな」
そう言い服部は自室に戻った。
「お前は一人十色だけどね」

拾　侍、名前で呼ぶ（後書き）

次は二巻の話しに戻りますが次のでストックが切れるので水曜か土曜の不定期更新となります。

拾壱　忍び、鏡と話す（前書き）

ドイツの黒ウサギの登場です。

拾壱　忍び、鏡と話す

忍びＳｉｄｅ

「改めて、よろしく頼む」
浩十郎の部屋から自室に戻りシャルルにそう言った。
「あ、うん。こちらこそ」
その後他愛ない話をし、眠りについた。

翌日

「えー、今日は新しい転校生を紹介します」
と山田先生が隣にいる生徒を紹介した。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
左目に眼帯を付けた白髪の女性がそう名乗った。
ボーデヴィッヒは名乗った後、周りを見渡し一夏の姿を見つけると近付き平手打ちを放った。
「私は認めない。貴様があの人の弟である事を…」
何か有りそうだな織斑先生と…何か
そう思ったがこの日は何事もなく過ぎていった。

翌日

浩十郎の話だと一夏の特訓をしているというので暇潰しに見にいった。
「あれ？慶三も来たんだ」
そこには一夏とオルコット、篠之乃、凰に浩十郎、シャルルがいた。
ずいぶんと大所帯だな。
「あぁ、暇潰しにな。今は何しているんだ？」
「射撃訓練だよ。一夏の装備って雪片弐型だけだけど何かの役に立

つと思うから」
「成る程な」
「お前もどう？射撃は得意でしょ？」
人前で話し方変わるのは相変わらずみたいだな。一昨日も確かそうだったが…
「それなりにだ。余り人前でやる気にはなれないのでな、勝手にやっててくれ」
そう言い、入り口近くの壁に腰を下ろす。
「そう？無理しなくて良いのに」
「何を無理するというのだ？」
「射撃マニアの癖に」
「黙れ。今日は飲み忘れたからやらないだけだ」
戦闘中は良く出てくるからな。飲み忘れで…
「あれ？そうなんだ。それならそうと先に言えば良いのに」
「俺がやらないのならそれ位の理由があると思え。ウマシカが」
「はいはい。それはどうもすいませんでした」
浩十郎はそれだけ言い凰と模擬戦をはじめた。
「分かれば良い」
「慶三ってどうしてそう他人と関わろうとしないの？」
シャルルがこちらにやってきてそう尋ねた。
「今日はやる気が起きないだけだ。それよりシャルルは俺の事より一夏の訓練を手伝わなくていいのか？そのために此処にいるのだろ？」
素っ気なく言うとシャルルは途端に不機嫌そうな顔になる。
「言われなくてもそうするよ。あ、一夏脇空いてるよ、ちゃんと締めて」
「あ、あぁすまん」
「あと、なるべく重心を移動させて視線の延長線上に…」
「…ん？お前達は手伝わないのか？」
訓練をするわけでも無いのにただ二人を観察する篠之乃とオルコッ

ト。
「篠之乃はともかくオルコットは何か手伝えるだろ？」
「わ、わたくしの銃は実弾ではありませんので初心者には難しいのですわ。それにわたくしの解説よりシャルルさんの方がよろしいみたいですし」
成る程な。
「ねぇ、ちょっとアレ…」
「うそ、ドイツの第三世代機よ。まだトライアル段階のはずなのに…」
一夏がマガジン一つを撃ち切るころ急に周りが騒めき始めた。
注目の的を見るとそれはＩＳを展開したドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒだった。
「……なんだよ」
一夏と何か話してるようだが生憎この距離では会話の内容は分からない。
話が終わったのかボーデヴィッヒはＩＳを戦闘状態にシフトさせた。
…来るな。
その予想通り数秒のタイムラグの後、右肩の大型砲が火を噴いた。
「ｆｉｉｉｉｉ」
口笛で高い音が鳴らし、黒鴉が弾丸を弾く。
「貴様…」
ボーデヴィッヒがこちらを睨む。
「（へぇ、ドイツ人は意外とキレやすい様で…）」
ドイツ語で悪態を吐き立ち上がる。
「邪魔だ。（平和ボケした国の代表候補生が私の前に現れるな）」
ボーデヴィッヒも何故かドイツ語で返す。
「…あんまり調子扱くんじゃねぇよ、餓鬼。俺を嘲笑うならそれで良い。だがな…」
黒影を展開し烏丸をビーム発射形態で構える。
「人を助けてくれた国を侮辱するのは許さないよ」

砲口から光が漏れ始める。
『そこの生徒！なにをやってる！学年とクラス、出席番号を言え！』
「……ふん、今日は引こう」
興が削がれたのかボーデヴィッヒはアリーナゲートへと去った
「（……ヴァーカ）」
そう呟き、チャージが終了している烏丸を先ほど一夏が撃っていた的に向けビーム放った。
ビームは的に当たり、的を消滅させた。
「興が削がれた。先に帰らしていただく」
誰に言うわけでもなくそう言い、ＩＳ解除しアリーナ出口へとむかった。
更衣室の自分の制服を入れたロッカーを空ける。
「……勝手に出てくるな」
ロッカーの扉についている鏡の中の自分に話し掛ける。
「…そう？激昂するあなたに代わって怒ってあげたのよ？あのまま放置してたら彼女重傷だったよ」
鏡の中の自分はクスクスと笑いそう答えた。
「…あのアマはそれほどの事をした。それだけだ」
「…おぉ、怖い怖い。でもね、やり過ぎると彼女に嫌われるよ」
「…誰の事を言っている？」
「…まぁた、とぼけちゃってぇ」
ニヤニヤと笑みを浮かべ俺を見る自分。
「…言っておくが、お前が誰の事を言っているのか知らないが。嫌われて結構だ、それくらいで嫌うくらいなら好きになるなと言いたい」
「…そうやって、一匹狼ぶってるといつか一人じゃできない事にぶつかるよ」
「あえて言おう。望むところだと」
それだけ言い、ロッカーの扉を閉めた。
「女を俺の仕事に巻き込んで怪我させるくらいならな」

最後にそう呟き部屋に戻った。

その会話が一人に聞かれていたことも知らずに

拾壱　忍び、鏡と話す（後書き）

次話は盗み聞きしてしまったあの子場面です。

拾壱．伍　貴公子、会話を聞いてしまう（前書き）

元々は前話と一つで一話だったのですが、そのまま続けるよりは二つに分けたほうが良いと思い、分けたため少し短いです。

拾壱．伍　貴公子、会話を聞いてしまう

貴公子Ｓｉｄｅ

慶三と話したい事があったから、一夏を箒さん達に任せて更衣室に来たんだけど…

「慶三、「勝手に出てくるな」…え？」

慶三はロッカーの扉に向かって何かをしゃべっていた。

僕は物陰に隠れてその様子を窺った。

「そう？激昂するあなたに代わって怒ってあげたのよ？あのまま放置してたら彼女重傷だったよ」

どこからともなくあの時の女性の声が聞こえてきた。慶三の黒影が一瞬白くなったときに聞こえたあの声が…

「…あのアマはそれほどの事をした。それだけだ」

彼の淡々とした口調が今は少しだけ苛立ちを含ましていた。

「…おぉ、怖い怖い。でもね、やり過ぎると彼女に嫌われるよ」

彼女？誰の事かな？

「…誰の事を言っている？」

「…まぁた、とぼけちゃってぇ」

っ！！い、今、なんか視線感じたんだけど…き、気のせいだよね

「…言っておくが、お前が誰の事を言っているのか知らない。だが嫌われて結構だ、それくらいで嫌うくらいなら好きになるなと言いたい」

…その言い方誰の事か分からないけど少しムッとする

「…そうやって、一匹狼ぶってるといつか一人で出来ない事にぶつかるよ」

「あえて言おう。望むところだと」

ダァンッ

たぶん自覚が無いと思うけどすごい音をたてロッカーの扉を閉める

慶三。
「女を俺の仕事に巻き込んで怪我させるくらいならな」
そう呟き、慶三は去っていった。
僕はその後ろ姿をただ眺めるだけしかできなかった。

……はぁっ
寮の自室の前で立ち止まりため息を吐く。
あんなの聞いた後どう言ったらいいのか分からなくなるよ
慶三の幽霊さん?との会話の内容と僕の話したい内容がまったく同じだったし、それへの答えと理由で少し入りづらく、ため息を吐く。
まぁ、こうしてても何も解決しないし慶三と話してみよう
決心をし、部屋に入る。が、
「あれ?居ない」
そこには慶三の影も形も無かった。戻ってきた痕跡はあるけど。
…あ、もしかして放課後のトレーニングかな?
一昨日聞いた慶三の習慣らしい早朝と夕方のトレーニング。…確か、織斑先生の二倍近くの量らしい、やっているところは見たことないけど。
それならまだ帰ってこないと思うし慶三が来るまでシャワーを浴びよ
僕はクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへと向かった。

忍びＳｉｄｅ

少し寄り道し過ぎたな。自分がふざけた事言うから頭の中ごちゃごちゃになって気晴らし走らねばならなくなった
「薬の量増やして完璧に消すか」

「ニャー！！酷い事言うなぁ！」
甲高い声が頭のなかに響く。
「ウザい、出て来るな、本当にするぞ」
「ふっふっふ、わらわを消す事など皆無じゃ！わらわはお主なのだからのぉ」
耳元で話し掛けられる錯覚に陥る。
「口調を変えるな」
「別に良いじゃない。わっちとしては夜中に君が寝てるときに身体借りたいのを我慢しているんだから。これくらい」
「やめい、無駄な脂肪を付けたくない」
邪魔なだけだあんなものはしかも左右一つずつとは
「戦姫（いくさひめ）は胸無しで決まり。つまり、お前は出て来るな」
「酷い事を言うわねぇ、こんなに大人の魅力に溢れた「俺は何も出来ぬがな」…あ、そう」
自分との会話を終わらし自室へと戻る。
「…シャルルはまだ、帰っていないのか」
と思ったがシャワールームから水音が聞こえてくる。
シャワーか。そういや、ボディソープが切れてるんだったなシャルルは知っているのか？
と予備のボディソープが入っている棚を開けると、やはり一本も減っていなかった。
仕方ない。届けてやるか、脱衣所に置いて声を掛ければ良いなそう思って俺は洗面所へと入る。

拾壱．伍　貴公子、会話を聞いてしまう（後書き）

次話は貴公子の秘密がバレます。

拾弐　忍び、貴公子？と約束をする（前書き）

投稿が遅れて済みません。
少しネタがつまり掛けているので今回以上に遅れる場合があるのでご了承願います。

拾弐　忍び、貴公子？と約束をする

扉を開け脱衣所に入る。
ガチャ
ちょうど良くシャルルが扉を開け姿を現す。
「丁度良い、替えのボディソー…」
「け、け慶三？」
「……ん？」
少し待て、声はシャルルだな？髪を解いているが顔はシャルルだな？声と顔はシャルルだ。そう声と顔だけ、それ以外は『女子』だ
「…え～と、そのぉ」
ヤバい、思考回路が追い付かない。しかし、確かな事は二つある。一つはシャルルは男で一つは目の前のシャルル似は女だという事だ。
「きゃあっ！？」
我に返った女子は胸を隠しシャワールームに逃げ込む。
「……と、取り敢えずボディソープ、此処に置いとく」
「う、うん」
同意を確認するのと同時に脱衣所を出る。
「黒影」
『何か御用ですか？我が主』
「少し、機能停止する。宗子が出たら、頼む」
『…御意』

数分後

「あ、あがったよ。慶三」
シャルルの声が聞こえたので再起動し後ろを向くと…シャルル似の女子だった
「シャルル…なのか？」

「うん、そうだよ…慶三」
そのまま二人は固まった。
最初に口を開いたのは俺だ。
「何故、男の振りを？」
「……実家の方からそうしろって言われてね」
「実家？というと確か親父がデュノア社の社長だったな」
少し前に聞いた覚えがある。
「そう。僕のお父さん。その人からの命令なんだよ」
「命令？親父だろ？何故そんな…」
「僕はね、愛人の子なんだよ」
……成る程。そういう事か
「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高いことがわかって、非公式であったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね…」
シャルルは此処に来るまでの事を話しそうだったので止めることにする。大体の想像はつくしな。「もう話さなくて良い」
それにシャルルの顔を見ていると黙って聞くのが馬鹿らしくなってきた。
「慶三？」
「ふざけた親父だな。仮にもテメエの娘だろ。それを…おい、シャルル。デュノア社本社が何処にあるの教えてくれ」
「え？聞いてどうするの？」
「なぁに、ちょっくら行って馬鹿親父の眉間に鉛玉を二三発撃ち込んでくるだけさ」
懐から取り出した拳銃をリロードする。
「え？…え！？ぼ、僕の為にそこまでしなくて良いから」
「女泣かす奴は例え神様だろうが仏様だろうがブチ殺し確定だ」
死ぬ一歩手前まで殴るか眉間に穴開けるかしないと気が済まねぇ
「け、慶三が殺人犯になるのは困るから止めてぇ！！」

「…そうか。気が進まないが止める」
女泣かす奴は許さねぇがその為に泣かしたら元も虎もないしな
そう納得し拳銃を片付ける。「それでこれからどうするんだ?」
「どうって…多分この事をフランス政府が知ったら黙ってないだろうから、強制送還で良くて牢屋行きかな?」
「それで良いのか?」
「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利はないし」
「有るぞ」
「え?」
少しにやりと笑い
「黒影、特記事項第二一を」
『御意。特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。』
「つまりだ。三年間は安全が保障されてるから大丈夫だ。卒業までじっくり考えれば良い」
「だけど、もし…」
「心配するな。シャルル、お前が此処に居たいのなら此処に居ろ。その時は俺が守る」
「う、うん」
少し顔を赤くさせるシャルル。
あれ?俺、浩十郎の特殊技能発動させてしまったのか? トントン
「「!?」」
「おーい、慶三ぉ、居るかぁ?」
こ、浩十郎か…なんだ驚かすな。…ん?
「……」
どうする?今あいつに入ってこられたらシャルルの秘密が一発でバレる。
「慶三ぉ、居ないのかぁ?居ないのなら突入しちゃうよぉ」
「ど、どうしよう?」

「とりあえず、俺が何とかするからシャルルは隠れてくれ」
「わ、分かった。取り敢えず身を潜めて…」
「ちょっ！何故クローゼットなのよ！」
どうする？どうするよ！…あ。
「シャルル、これ被って壁に張りついてて！」
「え？え、あ、うん」
なんか目を白黒させたけど私が渡した布を被って壁に張りついた。
ガチャ
「なぁんだ、居るなら居るって言ってよ。あ、宗子だったから答えなかったのかな？」
そうこ？…あれ？突発的に入れ替わってる。こんな事今まで無かったのに…
「た、単に寝呆けてただけよ！だってこんな時間だよ？いつのまにか入れ替わって寝てちゃ悪いの？」
早く出ていきなさぁい！あれ気配まで消せないんだからっ！
「で、何か用なわけ？あたし的にはまだ寝てたいんだけど？」
少し不機嫌気味に尋ねる。
「いや、用って訳じゃないんだけど…シャルル居ないかなって。ちょっと聞きたい事あったんだけど…」
シャルル？何の話か分かんないけどその子の為にも今日は退いてもらわないと…
「居ないけど。多分、更衣室じゃない？何か忘れ物したから取ってくるとか言ってたよ。まだ探してるんじゃないの？」
あのシャルルにそんな事あるわけ無いと思うけど…
「そうか、行き違いになったかな？ゴメンね。じゃ、お休み」
「うん、お休みぃ」

貴公子？Ｓｉｄｅ

「シャルル、これ被って壁に張りついてて！」
「え？え、あ、うん」
慶三から見たところ普通の黒っぽい茶色の布をもらう。
…あれ？目の前に居たのって慶三、だったよね？
その布を被ると意外とシースルーみたいな感じで布の向こう側が透けて見えた。
そこに居たのはやっぱり慶三ではなくＩＳ学園の男子用制服を着たショートカットの女の子だった。
女の子は私が布を被るのを見届けると玄関に向かっていき扉を開けた。
「なぁんだ、居るなら居るって言ってよ。あ、宗子だったから答えなかったのかな？」
知り合いなの？…あれ？だったから？なんか言い方可笑しいよね？
だってこの部屋のルームメートって僕と慶三の二人だし…
「た、単に寝呆けてただけよ！だってこんな時間なんだよ？いつのまにか入れ替わって寝てちゃ悪いの？」
入れ替わる？それってどういう事なの？
「で？何か用なわけ？あたし的にはまだ寝てたいんだけど？」
「いや、用って訳じゃないんだけど…シャルル居ないかなって。ちょっと聞きたい事あったんだけど…」
え？僕に？
「居ないけど？多分、更衣室じゃない？何か忘れ物したから取ってくるとか言ってたよ。まだ探してるんじゃないの？」
むぅ、僕そんなドジしないよ！
「そうか、行き違いになったかな。ゴメンね。じゃ、お休み」
「うん、お休みぃ」
扉が閉まる音がしたので布から出て玄関の方を見るとさっきの女の子が壁に凭れ掛かりため息を吐いていた。
「あの…誰なんですか？」
「ん？…あれ？いつ出て来てたの？ま、良いやそんな事」

そう言い僕の目の前を通り過ぎた。良く見ると背は僕りも頭一個程高く慶三と同じくらいだった。

「えっと…あたしが誰だって事だっけ？」

疲れたような声でそう尋ねる。

「う、うん。後、慶三は何処に行ったの？」

姿形が無いんだけど。

「あ～、簡単に言うよ」

そう言うと女の子は一呼吸置き

「あたしは服部慶三魔兼定。慶三はあたしなの」

一瞬頭の中が真っ白になった。

拾弐　忍び、貴公子？と約束をする（後書き）

次話の予定は慶三の過去が少し明らかになります。あとオリジナル展開です。

拾参　くノ一、貴公子？に話す（前書き）

更新が遅れてしまい誠に申し訳ありません。
今回は慶三の過去が少し明かされます。
グダグダ気味ですが暖かくお願いします。

拾参　くノ一、貴公子?に話す

くノ一Ｓｉｄｅ

やっぱり、分からないかな?難しすぎて
「分かりやすく言えば、多重人格者って分かる?」
「あ、うん。何となく」
「その異質版、あれは性格がガラリと変わるでしょ?でも、あたしの場合は性別的な性格が変わると身体的な特徴まで変わるの」
「例えば男の自分、つまり慶三ね。それが私の人格に変わると身体も女っぽくなるの。タイムラグ無しにそれは目の前で見てたシャルルなら分かるよね?」
そう尋ねると少し惚けていたシャルルは少し経ってからコクリと頷いた。
「でも、普通なら女の子っぽい性格でも身体は男の子だよね?」
「普通はね。ちょっと普通じゃないんだよ。あたしって…」昔の事を思い出しながら話し始める。
「昔色々あったの。ある任務でね親友とでも言うべき仲間を亡くしちゃったの」
「その娘を亡くしたショックでちょっと自暴自棄になってね、忍びにおける禁忌を犯しかけたの。まぁ、踏みとどまったけどまた犯さないようにするのとその罪を帳消しにするためにある秘薬を飲んだの。秘薬の効果は人それぞれ人の本質又は心の本音を外に出すって効果」
「それで多重人格に?」
「そう。自分の場合は親友を亡くした後悔と悲しみを無くしたいと心から願った。そのせいで今の自分が出来た。あまり感情を表に出さない忍びとしては最高の忍びに…私は自分から外された感情を保つために生まれたの」

それだけ言い少し暗くなった空気を払うために手を二回叩いた。
「さて、暗い話はこれでお終い。そして、またね」
宗くん、バトンタァッチ！

貴公子？Ｓｉｄｅ

「え？あの、またねって」
目の前には先程の女の人じゃなく僕が良く知っている慶三が居た。
「どうかしたのか？まぁ良い、腹も減ったし飯に行くか」
あれ？気付いてない？
「あぁ、シャルル。今のは誰にも言うな。今回はアイツが話したから仕方ないが…俺はあまり人に過去を話したくない」
やっぱり、気付いてたんだ。でも、多重人格者ってもう一人の人格の事って知らないものだよね？
それについて聞いてみると。
「最初はな少したった頃から俺の中に他の奴が居る事に気付きはじめた」
「それがさっきの女の人なんだ」
「あぁ、今じゃ。鏡の中の俺がアイツだったり、まわりに浮かんでいる気がするんだ」
なんかドッペルゲンガーみたいだね。
「シャルル。その特別製コルセット着けないとばれるぞ」
「あ。うん、そうだね」
…でも余り着けたくないんだよね。胸を圧迫して息がしづらいからコルセットを着けて慶三と一緒に食堂に向かう。
「……何かなアレ」
セシリアさんと箒さんが一夏の左右の腕に抱きついて歩いていた。
「気にせず通り過ぎれば良いんじゃないのか？オルコットと篠ノ乃は今のところ一夏以外を空気としか見てなさそうだしな」「でも一夏は？」

話し掛けられたら絶対足が留まると思う。
「両脇を固められてるんだ、早足で行けば何とかなる」
そう言い足を速める慶三に僕も着いていく。
「その後は…そういえば浩十郎の事忘れてたな」
そういえば、あの後何分か話して出てきたのに会わなかったね
「まあ、どうせ凰にでも捕まって食堂に居たりしてな」
「どうしてそう思うの」
「付き合ってるみたいだしな」
「え、そうなの？仲が良いなと思ったけど…」
そっか、そうなんだぁ
「そうらしい。転入した日の夜にアイツに話し聞いたから信憑性は高い」
「へぇ、そうなんだぁ」
今一瞬、一夏の声が聞こえた気がしたんだけど気のせいだよね？
「まぁ、今話すことでも無かったけどな」
「アハハ…」
凰さん、浩十郎くん、何かごめんなさい。
その後も他愛ない話をしながら歩いていき食堂に着いた。

忍びＳｉｄｅ

食堂につき中を見渡すと案の定、浩十郎と凰が一緒のテーブルで食事を取っていた。
「慶三の言うとおり凰さんと居たね」
「あぁ、アイツは女の頼みとか断れない奴だからな」
そう答え、食券を買い夕食を頼んだ。
「そうなの？…そういえば前に浩十郎が女性恐怖症って言ってたけどそれと関係あるの？」「まぁな、家が剣道道場で男ばっかりだって言ったよな？それと唯一と言っていい女友達が恐ろしいぐらいにキレやすい女で、よく殴られたり追い掛け回されたりしてたんだ」

「そんなに怖い人だったの？」
「あぁ、シャルルの高速切替（ラピッドスイッチ）を生身でやる程だからな」
「生身で？」
「ＩＳは持ってないんだが、どこからともなく無反動バズーカやら対戦車ライフルや、六連装ロケットランチャーを取り出してぶっ放すんだよ」
　ぁあ、昔思い出したせいで泣けてきた…
「どうしたの？」
「いや、ちょっと目にゴミが…」
「ふぅん…あ、浩十郎、同じ席で大丈夫かな？」
「え、あ、うん。別に良いよ。なっ？」「い、い良いよ。二人だけで暇だったし…」
少し残念そうな顔をする凰。
　…悪かったな
心の中で謝り席に着き食事を始める。
「…あ、そういえば慶三に聞いたんだけど僕に用事って何？」
「ん？あっ、そうだった…えっと…あれ？何か聞こうと思ったんだけどド忘れしちゃった」
アハハハと苦笑いする浩十郎。
　忘れてくれて良かったコイツの質問は何かしら人の聞いてはいけない事を聞いてくるからな。
その後、一夏が両手に花状態で登場し何かしら抗議してきたが話し掛けづらかったと弁解した。
食事を終え、シャルルと部屋に戻り雑談を少しし就寝した。
　…今気付いた。俺、母親以外の女と同じ部屋で寝た事がない。

拾参　くノ一、貴公子？に話す（後書き）

次話はもう完成しているので来週の水曜に更新します。
話は忍び→くの一　ＶＳ　黒兎です。

拾四　忍び、黒兎にキレる（前書き）

予告通り今回は忍びと黒兎との戦闘です。
先に捕捉説明しておきますと「〇」は翻訳した言葉です。実際はドイツ語で話しているという設定です。

拾四　忍び、黒兎にキレる

次の日

「そ、それはホントですの？！」
「それって一夏納得してるの？」
シャルルと一緒に教室に向かっているとオルコットと凰の声が聞こえてきた。
「何かな？」
「さあな。俺には関係の無いことだ」
シャルルが尋ねてきたのでそう答えた。
「織斑君の気持ちについては不確定だけど、噂は本当よ！月末の学年別トーナメントで優勝すると織斑君と交際でき」
「一夏がどうしたの？」
そのグループに近づき尋ねるシャルル。
「「きゃあああああっ！！？」」
悲鳴を上げるオルコットと他一名。
「…デ、デュノアじゃない。もう脅かさないでよ」
声こそ上げなかったが驚く凰。
「ご、ごめん。で、何の話だったの？一夏の名前が出てたけど…」
「あー、気にしないで。女子の会話に一夏が出てくる事なんてよくある事だから。ね？」
「う、うん。そうそう」
「よ、よくあることですわ」
凰の言葉に口裏を合わせるように頷く二人。
「あっ、もう少しでＨＲだし、あたしは自分のクラス戻るから。あ、浩十郎に昼休みになったらこっちに来るから待っててと伝えておいて」
周りを見ると確かに居ないな。

「了解した」
俺の言葉を聞くと凰は教室に戻っていった。
「で、ではわたくしも自分の席に着きませんと」
とそそくさと席に戻るオルコット。
「女子ってのはホントに噂話が好きだよな？」
「アハハハ…今は僕に振らないで」
苦笑いしながら応えるシャルル。
…それは悪かったな

放課後

暇つぶしがてらに一夏の特訓を見に第三アリーナに行くと
「何だ…これは？」
そこにはボロボロのオルコットと凰を痛め付けるボーデヴィッヒがいた。
装甲が至るところ破損している二人を先端に刃物の付いたワイヤーで捕まえ殴り続けていた。
「……下劣極まりないな」
『黒影展開』
黒影の無感情なボイスが響き黒影が展開される。
『任務、ドイツの野うさぎ狩り』
「任務了解、これより任務を開始する」
暗夜刀に手を掛け、瞬時加速をしボーデヴィッヒに接近する。
「（ドイツの兎、死ね）」
「っ？！」
ボーデヴィッヒは突然聞こえた声に対し目を向ける。
…掛かった
暗夜刀を抜刀し、ボーデヴィッヒにではなく二人を捕まえているワイヤーを切り裂く。
ワイヤーが切り裂かれ支えが無くなり地に落ちる直ぐ様二人を抱え、

離脱する。
ボーデヴィッヒから一番遠く離れたアリーナの壁沿いに二人を降ろす。
「あ…アンタ…」
「不覚を…取りましたわ」
「喋るな。意識は有るようだな。救護班が来るまでそこを動くなよ」
そう言い、野うさぎに目を向ける。
「邪魔をするな、スイスの初心者（ルーキー）。そこの二人みたいに壊されたくなかったらな」
楽しみを取られた餓鬼のような表情を見せる野うさぎ。

くノ一Ｓｉｄｅ

「フフッ、その口振り。わらわを倒すと仰りたいのか？」
暗器の扇子を口元に寄せる。
「愚民、お戯れを申すな。わらわはそこまで暇でない」
そう嫌味っぽく目を細め微笑む。
「だが、わらわはのぉ愚民。人を痛め付けて笑みを浮かべるような輩は反吐が出る程だいっ嫌いなのじゃ！」
左手に暗夜刀を握りビーム刃を伸ばし接近する。
「何をわけの分からないことをっ！」
ビーム刃を伸ばした暗夜刀で突きを打ち込む。が、
「っ！？」見えない糸に絡まったかのように動きが止められる。
「ふっ、所詮。よく吠える駄犬だったと言う事だ」
そう言いボーデヴィッヒは肩の大型砲をこちらに向ける。
「何を申す。わらわが駄犬？駄犬などソチではないのか？いや、駄うさぎか」
動かせない暗夜刀のビーム刃を延長させボーデヴィッヒに打ち込む。
「っ！？」

ボーデヴィッヒは直ぐに気付き回避行動を起こす。
それと同時に見えない糸が消えた様で体が動かせるようになりすぐに離脱する。
「烏丸、展開」
『烏丸展開、頭部装甲展開』
そのボイスと共に右手の団扇が消え烏丸が現出し、頭部装甲で顔が覆われる。
「フンッ、行くぞ」
ガギンッ！
ボーデヴィッヒが接近しようとした瞬間、横から割りいった何かに止められた。
「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」
それは黒いスーツ姿の織斑先生で、打鉄の近接ブレードを生身で持ちボーデヴィッヒを止めていた。
…化け物？！
「模擬戦をやるのは結構だが…決闘となったら話は別だ。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」
「教官がそうおっしゃるのなら」
ボーデヴィッヒは素直にうなずき、ＩＳを解除する。
「服部、お前もそれで良いか？」
「教師公認で戦えるのなら、わたくしも今回は引きます。まぁ、横槍を入れられ興も醒めましたし」
そう応え、暗夜刀と烏丸をしまい、頭部装甲を解除した。
「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」
パンッ！と織斑先生が強く手を叩いた。
「それと服部、人の事を化け物扱いはどうかと思うぞ」
心読まれた！？

拾四　忍び、黒兎にキレる（後書き）

今回は戦闘という戦闘はしていませんでしたが、多分トーナメント戦も一方的な展開になると思います。
次話はトーナメントの件とその後のシャルルの絡みです。
完成しましたら土曜に更新する予定です。

拾伍　忍びは貴公子?、侍は騎士と組む（前書き）

更新予定日から一週間も遅れてしまい誠に申し訳有りません。
それともう一つ予定ではアニメで言うトーナメント戦のチームが決まった後の池みたいな場所での会話が入るはずでしたが会話内容が決まらないのと長くなりかけたので分割することにしました。

拾伍　忍びは貴公子?、侍は騎士と組む

忍びＳｉｄｅ

場所は保健室、ベッドの上では治療を受け包帯の巻かれた凰とオルコットがむすっとした表情で外方を向いていた。
「別に助けてくれなくてよかったのに」
「もう少し待ってて貰えれば逆転出来ましたわ」
「お前らな…助けてもらっておいてそれは…」
「そうか、それは悪かったな」
「慶三…」
「だが、もし俺ならあの状況から逃れるすべを知らない。良ければその策を教えてくれぬか?」
少しくらいの感謝を言わないためにちょっとした意地悪で皮肉を込めそう尋ねる。
「そ、それは……」
「なんと答えましょうか…」
答えに迷う二人を横目に隣の一夏を見るとバカにしたような顔をしていた。
「一夏にだけはバカ扱いされたくない!」
「一夏さんこそ大バカですわ!」
「な、なぜわかった?!」
顔に出るから反撃を受けるんだ。自業自得だな。「好きな人に格好悪いところを見られたから。恥ずかしいんだよ」
シャルルが飲み物を買いに行って戻ってきていたらしく、何時から聞いていたのかその答えを答えてくれた。
「な、ななな何をいってるの?!全っ然っわかんないわね!こ、これだから欧州人は困るのよねっ!」
「べ、別に私はっ!そ、そういう邪推をされると些か気分を害しま

すわねっ！」
顔を真っ赤にさせまくしたてる二人。
「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」
二人は渡された飲み物を受け取り飲み始めた。
「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――」ドドドドドドッ
「ん？地震か」
　にしては縦ゆれが長いな
揺れは徐々に大きくなり音は気のせいか近付いてきている気が…っ！？
ドッカーン！
爆音と共に保健室のドアが吹き飛ぶ。…有り得ん
「織斑君！」「デュノア君！」「服部君！」「柳生君！」
入ってきた…否、雪崩込んできたのは数十の女子生徒だった。俺たちを包囲し、手を伸ばしてきた。見る限りの手、手、手、手。普通に怖い。
「な、な、なんだなんだ！？」
あまりの光景に若干引く一夏と大量の女子に包囲され後ろの壁に張りつきかける浩十郎。
「お前達落ち着け。まず事の説明を願いたい」
状況を飲み込むために説明を仰ぐと、俺たちに近い距離に居る女子生徒達は何やらゴソゴソしだし
「「「こ、これ！」」」
一斉に同じ用紙を取り出した。その中の一枚を取り、読み上げる。
「なになに…『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアの出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締切は――』」
「あぁ、慶三くん、そこまでで良いから。とにかくっ」
そしてまた一斉に伸びてくる手。恐ろしいから止めろ

「私と組もう、服部君！」
「私と組んで、デュノア君！」
成る程、トーナメントの対戦形式が２ｏｎ２になったからこの学校に四人しか居ない男子が誰かに組まれる前にいち早く組もうと、保健室にやって来たわけか…全く女ってのは。ハァ
「え、えっと…」
シャルルを見習わんものかね？肉食系より草食寄りの方が好きなんだがねぇ。俺は…
…そういや、シャルルは女子だったな。誰かにバレるのは色々と不味い、それに守ってやるって言ったしな
そう思いシャルルを見ると、ちょうどシャルルもこちらを困り果てた顔で見ていたがこちらの視線に気付くと直ぐに逸らした。
全く、コイツはコイツで。人を頼るというものを知らないんだから…仕方ない
「すまない。初対面の人と組んで良い成績を残せると思えない。だから俺はシャルルと組む。他をあたってくれ」少し静まり返り
「まあ、そういう事なら…」
「理由もなしに断られるよりは…」
「じゃあ、織斑君！私と組もう！」
「柳生君！組んでくれない…か、な…や、やっぱり織斑君！」
そう言い狙いを残りの二人…いや、一夏に定めた。まぁ、俺でも解るくらいの殺気があるベッドの上から発しられてるしな。
「ふふん！浩十郎、あたしとくも「駄目ですよ」」
凰の言葉を遮る声が聞こえるのと同時に女子生徒群衆の間から山田先生が現れた。
「凰さんのＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージがレベルＣを越えているので当分は修復に専念しないといけなくなりますので、ＩＳを休ませる意味を兼ねてトーナメント参加は許可できません。勿論、オルコットさんも」

侍Ｓｉｄｅ

「うっ、ぐっ…わ、わかりました…」
「不本意ですが、ひっじょおにっ！不本意ですが！トーナメント参加は辞退します…」
とても悔しそうな顔で引き下がるセシリアさんと鈴。まっ、仕方ないよね。
「と、いうことは…柳生君！凰さんが辞退するから私と組もう！」
とまた僕に向かって手が延び始める。ど、どうする？！
ゴゴゴゴゴゴ…
ビクッ！
「コウ、分かってるよね？」
後ろから聞こえるＤＥＡＤｏｒＡＬＩＶＥの声。
目の前にある手を取ったら確実にＤＥＡＤ確定。
どうする？何処にＡＬＩＶＥ確定の道は
「織斑君！私と組んで！」
…あった。

そのカンダダの蜘蛛の糸とも言える者の肩に手を回した。
「ゴメン、僕は一夏と組むから諦めて」
「お、おい！勝手になにをっ」
何かを抗議するソイツの肩を組んだまま他の女子に聞かれぬように後ろを向き小声で告げた。
「一夏ぁ、こっちは生死がかかってるの！鈴以外の女子と組んだら『よしっ殺そう♪』的なバッドエンドに向かっちゃうの！だから助けると思ってぇ」

「わ、分かったよ」
これでＤＥＡＤ回避成功…
「一夏も了承してくれたからゴメンなさい」
わざわざ足を運んでもらった事も含め頭を下げて断る。「うっ、そこまでされちゃうと…なんか、ねぇ？」
「こっちが何か悪役みたいに感じちゃうね」
「まぁ、他の女子と組まれるよりは…」
「トーナメント戦で芽生える友情を越えた…うん、イケる！」
と、口々に言いながら去っていく中、上級生の一人がふと脚を止めこちらを振り返り
「柳生君、大変そうだね。そんな娘と一緒にいて」
「もう慣れました」
苦笑い気味に応える。
「フフッ、これはこれでお似合い…なのかな？」
と僕と鈴を交互に眺めながらそう言い帰っていった。
「何なの、あの上級生？」
「さ、さぁ？」

拾伍　忍びは貴公子?、侍は騎士と組む（後書き）

最後の上級生は蛇足かなと思いつつ載せました。
次の更新の予定日は有りません。
出来しだい最寄りの水土に更新いたします。
ついでに此処で他に連載している作品ですがネタが浮かばないのでまだまだ更新できる事はありません。誠に申し訳有りません。

拾伍．伍　忍び、貴公子？に…（前書き）

お待たせしました、前回の続きです。
今回は拾話の鈴並にてこずりました。けど、何時も通りの出来なので暖かい目でお願いします。

拾伍．伍　忍び、貴公子？に…

忍びＳｉｄｅ

「あ、あのね、慶三」
「ん？」
夕食後、部屋に二人で戻る途中、シャルルが突然口を開いた。
「あの、遅くなっちゃったけど…助けてくれてありがとう」
「…俺はお前に何かお礼を言われるような事をしたか？」
先日の件はもう終わった事だし、何かあったか？
「ほら、保健室で。トーナメントのペアを言いだしてくれたの、すごく嬉しかった」
「あぁ、ソレか。気にするな。事情が事情だしな。それにその時に言っただろ？初対面の奴と組んで良い成績が残せると思えんと。ただそれだけだ」
それに守ると言ったしな。口に出して言わないが「それでも、それが普通に出来るのは慶三が優しいからだよ。誰かのために自分から名乗り出られるなんて、凄く素敵なことだと「買い被るな」慶三？」
「俺はそんな奴じゃない。俺はただ自分の利益を最優先にしただけだ」
忍びに優しさはいらない。感情を殺し任務を全う。だからアイツは死んだ
「他人と組むよりは顔見知りと組むのが得策。だからシャルルと組んだ。約束を守るのも込みで」
「約束が無かったら…一夏とも組んだの？」
「…どうだろう？多分どちらにしろ、やはりシャルルと組んだかもな」
「そう、なの？」

「あぁ、シャルルとなら。良いパートナーになれるだろうな」
そう答え、シャルルの顔を見る。
…なんか、よぉく見るとアイツに似てるな。そのせいか?守りたくなるのは…「け、慶三どうしたの?」
少し頬を赤く染めてこちらを見るシャルル。
「ん。すまん、少し考え事をしていた。そういえばシャルル。二人だけの時は普通に女の子みたいに話したらどうだ?」
そう四六時中男の口調で話すのも疲れるだろ?
「う、うん。僕…私もそう思うんだけど、ここに来る前に徹底的に覚えさせられたから、すぐには直らないかも」
「…やはり、一発「しなくて良いからね」…そうか。シャルルがそう言うのなら」
シャルルの親父の話を聞くたびに殺したくなるの、直さなくてはいけないな
「そ、その…やっぱり女の子っぽくないかな?」
「ん?自分の事を僕っていうのか?」
「そ、そう。女の子っぽくないんだったら、二人きりのときだけでも普通に話すように頑張るけど…」「いや、別に今のままで良いと思う。シャルルが僕と言おうが私と言おうがシャルルは女の子なのだから気にする事はない。シャルルは今のままでも十分可愛いのだからな」
それに頑張るくらいなら強制はしない
「か、可愛い、?僕が?本当に?ウソついてない?」
何故、嘘を吐かねばならん?
「嘘を吐くわけがないだろう。嘘を吐いてなんになる?」
「そう、なんだ。うん、じゃあ良いかな?うん」
うん、うんと頷きをやめないシャルル。
そこまで喜んでもらうと少し照れる
「さて、部屋に戻るぞ。織斑先生に何を言われるか分からないしな」
「あ、うん。そうだね」

そして、部屋に戻ったのだが…
「い、良いよ。慶三に悪いし、その…僕は気にしないから」
「いや、俺が気にする」
何故こうなったかというと、お互いまだ制服のままなので着替えることになったのだがシャルルの着替えの場にいるわけもいかず着替え待ちがてら夜間トレーニングをしようと思ったのだが…シャルルが気にしなくて良いと言いこの言い合いになっている。
「で、でも…ほら！男同士なのに着替え中に外に出たりしたら変に思われちゃうでしょ？」
「なら、俺が夜間トレーニングをしている間に暇を持て余した事にすれば良い」
「だ、だからそんなに気を遣わなくてもいいってば！普通にしてて」
むぅ、これでは一向に終わらぬな。…仕方ない
「分かった。なら背中合わせに着替えよう」
「うん、そうしよ」
ニコッとシャルルが笑みを浮かべる。
…っ、さすが仏蘭西人、異性の喜ばせ方を知っている　↑（偏見）
背中合わせに着替えを始めたのは良いが…
するっ
…気になる
時折聞こえる衣擦れの音とほのかに香る甘い匂いのせいで集中できずいつも以上に着替えに時間が掛かってしまう。
くそっ、ウチの馬鹿くの一共めもう少し女磨いてから人の近くで着替えろ！
「……」じぃぃぃ
…視線が背中に刺さるのを感じるんだが
「…シャルル？」
「ふぇっ？！な、何かな？」

物凄く動揺した声が帰ってくる。
「もしかして、こちらを見ているか？」
「そんなことないよ！？」
「そうか、悪かった」
そこまで否定するものか？
着替えを再開するも、
「……」じいぃぃ
気のせい、ではないな
「シャルル、覗くなっ」
すこし語尾を強く言う。
「ふぇっ？！そ、そんなことしてっ　きゃんっ！」
どてっ
痛そうな音と悲鳴が聞こえたので振り向きかけたが背後の光景の最悪なパターンが浮かんだので直ぐに思い止まり体の向きを戻す。「大丈夫か？痛そうな音が聞こえたが」
「いたたた…うん、大丈夫。足が引っ掛かっただけだから」
「覗いたから罰が当たったんだな」
少し皮肉を込めてからかってみる。
「の、覗いてないよっ！慶三のバカ！」
むっ、少しからかっただけなのだが、バカと言われるとは…
「それはすまなかったな」
そう答え着替えを続行する。

シャルルの着替えも終わったので就寝する事にした。

貴公子？Ｓｉｄｅ

電気を消したのだが、なかなか寝付けないシャルルがいた。
「慶三、起きてる？」

「Ｚｚｚ．．．」
もう、寝てるよ
シャルルはベッドから出て、慶三の近くに寄る。
慶三の寝顔を見て、あの言葉を思い出した。
『ここに居たいのならここに居ろ。その時は俺が守る』
やっぱり、慶三は優しいよ。それに…格好良い
今日だって、自分の利益とか言ってるのに僕の事を考えてくれてた
「ズルいよね。慶三は」
こんなにも好いてくれる人が居るのに、知らない振りして…だからなのかな？助けてあげたくなるのは

拾伍．伍　忍び、貴公子？に…（後書き）

次回はトーナメント戦に入ります。
戦闘の大半がオリジナルなのでまた更新に時間が掛かると思いますので気長にお待ちください。

拾陸　忍び、黒兎を狩る（前書き）

戦闘描写が完成いたしました。
いつも通りの出来なのでいつも通り暖かい目でお願いします。

拾陸　忍び、黒兎を狩る

トーナメント当日

現在は男子更衣室で待機中

「すごいなこりゃ…」

　確かに…

観客席には各国の政府関係者、研究所員、企業エージェントなど盛大な顔触れがあった。よく見るとその中にはディニスらしき女性もいた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認に来ているからね。一年には今のところ関係の無いところだけど、でも上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふぅん、ご苦労な事で」

　コイツ何か肝心なこと忘れてないか？

「一夏、他人事みたいだけど僕達にも注目がいくからね？実際のところ」

「あぁ、世界にたった四人の男性操縦者の実力、注目の的間違いなしだ。下手な事出来ぬぞ？一夏」

「うっ…た、確かにそうかもしれないな」

「まぁ、特訓してきたんだしそれなりの実力は出せると思うよ」

「あ、あぁ。お、対戦表が出来たみたいだぞ」

モニター画面がかわり対戦表が表示された。

「…え」「ほう、これは…」

　何という幸運

予選第一回戦一組目

服部　慶三魔　兼定＆amp;シャルル・デュノアvsラウラ・ボーデヴィッヒ＆amp;篠之乃　箒

試合開始前

アリーナ中央近くで向き合う二機と二機のＩＳ。
「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けた」
「奇遇だな。俺もだ」
試合開始のチャイムが鳴る。
「「叩きつぶす」」
試合開始と同時に瞬時加速を行い接近をする。
「ふっ」
ボーデヴィッヒの右手がこちらに向けられる。…来る

数日前
「アイツのあの武装は何だ？いきなり体が動かなくなったが」
「ＡＩＣですわ」
「ＡＩＣ？意味はなんだ」
「アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略で、意味は慣性停止能力よ」
「慣性、停止…スマン、もう少し分かりやすく言ってくれ」
ＩＳ操縦者なら誰でも分かるのか？それは
「アンタ、意外と一夏並みの頭なの？まぁ良いわ、あたしの甲龍に積まれてる衝撃砲あるでしょ？原理的には同じなんだけどあっちは空間圧作用兵器と似たようなエネルギーで制御してるはずよ」
「…つまり物理的な物だけを止められるわけか。銃の弾丸とか爆風とかも」
「だと思いますわ。私のミサイル型のブルーティアーズも無力でしたし」
「という事は唯一の攻撃手段は光学兵器のみか…」
他に対策を考えないとだな

攻撃はＡＩＣによって届く前に止められる。
「開幕直後の先制攻撃か。分かりやすいな」
「…そうか」
ガキンとレール砲の弾頭が装填される音が響く。
「なら、早く離れたほうが良くないか？分かるのなら…」
そうだろう。な？
「させないよ」
シャルルが俺の後ろから飛び出しアサルトカノンによる射撃を浴びせる。
「ちっ……」
レール砲に弾丸が辺り射線をずらされ放たれた弾丸は空を切る。ボーデヴィッヒは急後退して間合いをとる。
「逃がさない！」
シャルルは追撃を加えるもその間に篠ノ乃が割って入り実態シールドで攻撃を防ぐ。
「私を忘れてもらっては困る」
銃撃が止むと篠ノ乃は近接ブレードで斬り掛かる。
「シャルル、篠ノ乃の方頼む」
「分かった！」
シャルルの返事を聞き、暗夜刀の一本を片手に持つ。「同調能力（シンクロシステム）、発動」
『御意、頭部装甲展開』
さて、始めようか。

くの一Ｓｉｄｅ

兎狩りの舞踏（ワルツ）を

「また色が変わった。それで何の意味があるんだ？」

「戦えば分かるよ。その意味を…」

そう言葉を紡ぎ突撃をする。

「無駄な事を…」

そしてまた、ＡＩＣに止められる。

「ざぁんねん。はっずれ～」

「なに？……っ！」

忍びＳｉｄｅ

「忍法、代身分身」

ボーデヴィッヒの背後で烏丸を構え、狙撃をする。

攻撃は寸でのところで回避されるがビームは擦りシールドエネルギーが減る。

目の前が揺らめき、意識があちらに戻る。

くの一Ｓｉｄｅ

ＡＩＣの力が消え、身動き可能になる。

「よそ見してる暇ないよ！」

ボーデヴィッヒがこちらを振り向く前にビーム刃を伸ばした小太刀の突きを打ち込むと直撃し、ボーデヴィッヒのシールドエネルギーが大幅に減る。

「くっ…こんの！」

ボーデヴィッヒは振り向きざまにプラズマ手刀をたたき込んでくる。
が、それを後退しつつ避け距離をとる。
「ふぅ、おっと」一息ついてボーデヴィッヒの方を見るといくつも
のワイヤーブレードが向ってきていた。
やってくる六本のワイヤーブレードをもう一本の小太刀を取出し、
二本で応戦する。
「〜〜♪」
口笛を吹き、四つの誘導兵器、白き鳩(ヴァイス・タウベ)を操りワイヤーを切断したり、
ブレード部に当てて攻撃を弾く。「ちっ、小癪な…」
「ごめんねぇ。普通のあたし、小悪魔な性格だからぁ…」
左手にある小太刀をボーデヴィッヒに投げつける。
当然のごとく、ボーデヴィッヒはそれをプラズマ手刀でたたき落と
す。
「とぉってもずる賢いんだよねぇ」
その左手にはチャージ完了しても発射されず過チャージされ続け砲
身から赤い光が漏れ始めた烏丸。
「っ!!」
カチン
引き金が引かれその銃口からはその三倍以上あるかと思われる極太
のビームが発射された。
ボーデヴィッヒはそのビームから逃れようとするも上空、左右、後
方から白い鳩がビームを放ち足止めをする。
ボーデヴィッヒは為す術なく飲み込まれる。ピシッ
っ!?
嫌な音が響き、烏丸にヒビが入りそこから光が漏れ始める。
「あらぁ、やっちゃった」
宗君の大切な銃、壊しちゃった…怒られちゃうよぉ…
銃が破損したためビームは直ぐに終息し、そこには光に呑み込まれ
装甲の一部が融解し、レール砲は見る影もなく溶け落ちボロボロに
なったシュヴァルツェア・レーゲンを纏ったボーデヴィッヒが現れ

た。
雀の涙ほどのシールドエネルギーが残っているらしく、いつの間にかシールドエネルギーが底を突いてそこで放置されている篠ノ乃がいるにも係わらず戦闘終了のチャイムがならない。
…しゃぁない
右手に残っている小太刀のビーム刃を伸ばし近づき、振り下ろす。
が、その瞬間
「あああああああっ！！！」
突然、ラウラが絶叫を発しソレに呼応するかの如くシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれる。あたしはソレをまともに受け吹き飛ばされる。
な?！まさか、こんなものを隠して…なに、あれ
「い、いったい何が……！?」
あたしも多分、宗君も目を疑った。その視線の先にあったのは先ほどところどころ融解しボロボロだったボーデヴィッヒのＩＳが変形していた。
変形、というよりＩＳがメタルスライム状にドロドロに溶けボーデヴィッヒを呑み込み形をかえ始めた。
「な、何なの、あれ…」
そのＩＳだったものは人型を形取り始め、徐々に姿を完成させ始めた。
黒い全身装甲で最小限のアーマーを身につけ、頭部はフルフェイスアーマーに覆われラインアイ・センサーが赤く光っていた。「…黒影、何か分かる?」
『データ照合、ＶＴシステムと判明。正式名称、ヴァルキリー・トレースシステムは過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステム。現在は研究、開発、使用全てが禁止されています』
「そう、なの。で?トレース相手は?」
…ま、持ってるものを見れば分かるけどね

所持装備は右手に持つ、たった一本の刀のみ。つまり…
『所持武器、モンド・グロッソ受賞者データ照合により、織物千冬と判断』
あ～ぁ、なら、宗君。後は楽しんでねぇ

忍びＳｉｄｅ

…まさか、この状況で返されるとは…
「さて、近接戦で片を付けるか」
烏丸はアイツが無茶したせいで壊れたしな
両手に暗夜刀を持ち接近する、が…
『警告、左側ピットより飛び出す機体あり』
黒影の警告により接近を止め、その方向を見る。
「ふざけるなっ！それは千冬姉のもんだ！」
雪片弐型を持ちボーデヴィッヒだったものに対し突撃する白式の姿が目に入った。
「あんの馬鹿騎士！！」
苦無を三本取出し黒いＩＳの足元に向け放ち、それと同時に二体のＩＳに接近する。
苦無は黒いＩＳの足元にぶつかり砂煙を巻き上げ爆発する。
「えっ…おわっ？！」
一夏が呆気に取られスピードを緩めるのを確認し、白式に回し蹴りを食らわし黒いＩＳと距離を取らせる。
「っつ、何するんだ！」
「何するんだ？それは俺が言いたい言葉だ。激昂する理由は知らぬが少しは頭を冷やせ、負けるぞ」「っ！…スマン、取り乱してた」
「ふっ…ならコイツを倒せるな？」
「あぁ、アイツは一発殴んねえと気が済まねぇ」
「そうか、なら俺の分も殴っておけ。理不尽なまでに」

「あ、あぁ。なら、援護頼んだ」
「ん。シャルル、話は聞いたな」
予備用のアサルトライフルを取出す。
「分かった。援護は僕と慶三に任せて行って」
「あぁ、分かった！」
一夏が黒いＩＳに突撃するのを確認し、シャルルと共にその場で援護射撃をする。
「ソレはただの真似事だ」
一夏は抜刀の構えを取り相手の袈裟斬りを横一閃し刀を弾き、すかさず上段の構えで打ち下ろす。
「ギ、ギ…ガ……」
黒いＩＳに紫電が走り真っ二つに割れ、そこからボーデヴィッヒが出てきて一夏に抱えられる。
「――――――」
一夏が何かを言ったみたいだが聞き取れなかった。

拾陸　忍び、黒兎を狩る（後書き）

次回で二巻終了です。
後で黒影の単一仕様能力を更新しておきます。
ついでに次話からシャルルの呼称が変わります。

拾漆　忍び、貴公子？再編入する（前書き）

意外と早く出来上がったの上げました。
出来は何時も通りなのでいつも通りで…

拾漆　忍び、貴公子？再編入する

「やっぱりトーナメント中止だね」
「あぁ、だがデータは取りたいから一回戦は全てやるらしいな」
「そうみたいだね」
「一夏と浩十郎コンビと戦ってみたかったな」
「あぁ、僕もやりたかったなぁ」
「しょうがないよ、こんな事あったんだから。今度許可取ってやろうよ」
「あっ、その時は私が組むからね！」
事情聴取が終わったので、シャルルと待っていてくれた浩十郎と凰と四人で食事をしている。
一夏はまだ事情聴取中、というか許可なく介入したための折檻中。
（織斑先生による）
「…優勝…チャンス…消え…」
「交際…無効…」
「…うわあああんっ！」
と走り去っていく女子軍…かわいそうに
「何なのアレ？」
「…さぁ？」
浩十郎の疑問に苦笑い気味に否定する凰。
「慶三知らない？」
「あぁ、一応調べた」
というか宗子が勝手に布仏（のほとけ）に聞きに行った
「何でも、トーナメントに優勝すれば一夏と付き合える、らしい」
「え？誰が言ったのそんな事」
「言うかそんな事。そいつのプライバシーに関わる」
まぁ、発信源も意図しない程の尾ヒレの付き方だしな
「ふぅん「おぉい、皆！」あ、噂をすれば」

一夏が嬉しそうな笑みを浮かべ此方に向ってきた。
「どうした？何か嬉しいことでもあったか？」
「聞いてくれ！なんと今日から大浴場が使えるようになったんだ！
！」
「…え！」
……まずいな
「ほ、本当なの？一夏」
「本当だ！大浴場で待ってるからな！」
と走っていく一夏。「慶三…どうしよう」
「…どうしたものか」
一夏だけなら手刀かませば黙らせられる。問題は浩十郎の方だ。
「ん？何か問題でもあるの？」
「…浩十郎、一夏を二時間程監禁してくれないか？」
「……は？いきなり何言ってるの？」
浩十郎の横で聞いていた凰が呆れ顔で言う。
…だよ、な
「…二時間程で良いの？」
「え。コウ？」
「引き受けてくれるのか？」
「失敗するかもしれないけど」
「構わん。その時はこちらでなんとかする」
そう答え、席を立ち一夏の元に向かった。
良い仲間を持ったな。俺は…
一夏の部屋の方に向かうとちょうど一夏が部屋から出てきていた。
「お、慶三どうしたっ？！」
一夏の鳩尾を殴り、直ぐ様後ろに周り首に手刀を打ち込む。
「悪いな。お前に恨みはないが、シャルルのためだ。恨むなよ」
崩れ落ちた一夏のポケットの中を漁りカードキーを探しだし一夏の
部屋の鍵を開け一夏をベッドの上に放り投げる。
「慶三っ、何してるの！？」

俺を追い掛けてきたのかシャルルが部屋の前にいた。
「監禁しやすいように寝かし付けただけだ。当分は起きない」
「寝かしたというより気絶させたの方が合ってる気が…」
「気にするな、俺は気にしない。後は浩十郎と凰に任せて俺達大浴場に行くとしよう」
「う、うん」

大浴場前

「あれ?織斑くんはどうしました?それに柳生くんも」
心配ない。想定の範囲内だ
「一夏は織斑先生との話し合いで疲れたから少し寝ると言ってました。浩十郎の方は知りません」
「そうですか。これ、鍵です」
と風呂の鍵を俺に渡し、去っていった。
「さて、シャルルだけ入って来い」
「え?慶三はどうするの」
「お前が上がった後で浩十郎達とゆっくり入る」
「そ、そんな気を使わなくて良いよ」
「…一言だけ言う、レディファーストだ。じゃ」
それだけ言い部屋へと戻ろうとする。
ガシッ
「慶三、疲れてる?」
俺の腕を掴みながら聞いてくるシャルル。
「あぁ、それなりに」
「じゃあ、先に入ってよ」
たく、誰の為に一夏が気絶してるのやら…しかし、このままじゃ押し問答が続きそうだし…仕方ない
「分かった。入る」
俺はシャルルに部屋に戻っておくように言い、脱衣場に入り服を脱

ぐ。
浴場に入り、シャワーを浴びて湯槽に浸かる。
「良いな良いなぁ。あたしもお風呂入りたいぃ」
「…烏丸」
ぼそりと一言言うと宗子はうっと言葉をつまらせる。
「雑賀の形見。壊したよな？」
それに似せられた黒影の射撃武器。
「だって、そこまで過チャージされるとは思わなかったから。…ごめんなさい」
「…分かった。だが、二度目は無いからな」
「分かりました。…ん？…ニハッ、何か面白い事起きそっ」
それだけ言い残し消える宗子。カラカラカラ…
宗子が消えて数秒せずに扉が開く音が聞こえる。
「誰だ？……っ？！」
振り向くと俺は硬直した。
「お、お邪魔します」
何故かそこにシャルルが居たからだ、当然ながら服を身につけていない。
シャルルは薄手のスポーツタオルを体に当てていたためうっすらと肌色が見え、逆光によりボディラインがはっきり見えてしまう。
「しゃ、シャルル・デュノア…」
余りの事にフルネームを言ってしまった。
「あ、あんまり見ないで…」「っ！す、すまない」
俺はすぐに体を戻しシャルルに背を向ける。
ちゃぷん、と浴槽に入る音が聞こえる。
「しゃ、シャルル。どういうつもりだ？いや、責めてるわけではないが…」
な、何をどうすればこういう状況になるんだ？意味が分からん
「ぼ、僕と一緒だとイヤ？」
「いや、決してそういう意味では…」

ま、まさかシャルルまでも肉食系なのか？いやいや、ウチの馬鹿くノ一どもはシャルルの様に入らず堂々と…いやいや、論点はそこではないそこでは…「その、話があって…」
「話？」
「うん、大事な話。慶三にも聞いてほしい」
「…分かった」
俺に聞いてほしい話なら聞かないわけにもいかないな。しかし、部屋という選択肢はなかったのか…
「その…前に言っていたこと、なんだけど」
「前に……学校に残るって話か？」
「そう、それ。僕ね、此処に居ようと思う。僕はまだ此処だって思える居場所を見つけてないし。それに…」
「それに…何だ？」
そう尋ねても返事が無い。
ちゃぷと音が聞こえ、何かが動く感じがした。
シャルル？どうかしたのか？
ぴとっ、と俺の背にシャルルの手が触れる。…何故シャルルと思うかだと？背中にシャルルの息遣いが聞こえるからだ。
「しゃ、シャル…」
そのまま、手は俺を後ろから抱きしめる。
…平常心を保て、何も考えるな
「慶三が、ここに居ろって言ってくれたから。そんな慶三が居るから、此処に居たいって思えたんだよ」
…ヤバイ、柳生病を発症してしまったらしい「そうか。おまえがそう決めたんなら、好きにしろ」
そう言い、シャルルの手を優しく外す。
「俺はお前と約束したことを守るだけだ」
「それでも良いよ、慶三がそうしたいんなら。ただし、僕の事はこれからシャルロットって読んでくれる？」
「シャルロット？それが本当の…」

「そう、僕の名前」
「そうか、ならシャルロット。俺は服部宗一だ」
「服部、宗一？」
「あぁ、服部慶三魔兼定は襲名した名前だ。だから、これが俺の本名だ」
「宗一…うん、良い名前」
優しい笑みを浮かべるシャル、シャルロット。…やはり、アイツに似てるな。ぜんっぜん性格違うが
「で、シャルロット。もう上がらないか？」
「あ、うん、そうだね。宗一」

三人称Ｓｉｄｅ

翌日
教室にはシャルルと慶三の姿はなかった。
「今日は、ですね…皆さんに転校生を紹介します。転校生と言いますか、すでに紹介は済んでいると言いますか…ええと」
山田先生の転校生という言葉に反応しはじめる生徒達。
「取り敢えず入ってください」
「「失礼します」」
聞こえてきた二人の声は皆は聞き覚えのある声であった。
「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めて宜しくお願いします」
「服部宗一だ。襲名前の名前で通う事にした。またよろしく頼む」
「えぇと、デュノア君はデュノアさんで服部君は宗一という名前でした。」
「え？デュノア君って女……？」
「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「服部君、名前が違ったの？襲名前って何？」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね？！」
一瞬にして喧騒に包まれる教室。

忍びＳｉｄｅ

騒がしいなぁ…まぁ、最初のキー音の高い声よりは良い…
ドカーン！！
「け、慶三ぉ。昨日のあれはこういう事だったのね…」
ＩＳアーマーを展開し、ドアを壁ごとぶち破り登場した凰。
「コウの友達だったとしても捨ておけない…死ねぇ！！！」
肩の衝撃砲が放たれる。見た感じフルパワーで…
「黒翼展開」
黒影の背部のみ展開し、黒い粒子を生み出し砲弾を受け止め消滅させる
「まだまだぁ！！」
凰は両肩の衝撃砲を交互に放ち始める。
黒い粒子を使い打ち消していく。が
「あ」
凰の間抜けな声と共に狙いを外れた砲弾が俺のすぐ真横近くにいた一夏に向っていく。
ヤバ、一夏。スマン
しかし、爆発音は鳴らない何故なら一夏の前にＩＳを展開したラウラが割って入り、衝撃砲を相殺していた。「助かったぜ、サンキュ。
……っていうかお前のＩＳもう直ったのか？」
「……コアが辛うじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」
「へー。そうなん――むぐっ！？」
……ん？
いきなりの事で茫然としてしまったが、ラウラが一夏の胸ぐらを掴み、引き寄せキスをしていた。

「!?!?!?!?」

混乱してるな。無理もないか

「お、お前は私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

「…嫁?婿じゃなくて?」

余りの出来事すぎて逆に冷静になったらしくもっともな突っ込みを入れる一夏。

ヒュウウゥ…

…やけに肌寒い気がするな

「あ、あんたねぇぇ!!公衆の面前で何してるのぉ!!!」

ジャキン!

狙いを一夏に変え、再度衝撃砲を構える。

身の危険を感じてか一夏は後ろの出入口から逃げようとする。

ビシュンッ!!

一夏の目の前をセシリアのスターライトMk2から放たれたレーザーが通る。…おぉ、人が殺せそうな笑みとはこの事か

一夏は出入口からの逃亡を諦め窓から逃げようとするが。

ダンッ!

目の前に篠ノ乃の日本刀が突き刺さる。…鬼姫ってアイツの事を言うのか。納得

一夏は宛ての無い逃亡をはじめようとするが、目の前には凰が…

「は、はは、ははは…」

もう、諦めたような笑いをする一夏に砲弾が発射される。

咄嗟にシャルロットを庇うよう肩を抱き地面に伏せさせる。

ドガアアアンッ!!!

俺はこの時初めて知った。凰鈴音、俺に対しての衝撃砲は全く本気じゃなかった事を…

拾漆　忍び、貴公子？再編入する（後書き）

鈴が暴走しないとラウラが登場できないので最初の登場理由を変えてみました。
次話は宗一とシャルロットが買い物に行きます。もしかしたら宗子が出てくるかも知れません。

拾捌　仏少女、妄想する（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。
その割に出来はいつも通りなので何時も通りでお願いします。

拾捌　仏少女、妄想する

「ゴメンね、手伝わせちゃって」
「問題ない」
放課後の廊下、赤い夕日が射し込む中を宗一とシャルロットが並んで歩いていた。二人とも、その手には今月の学校行事、臨海学校について書かれたプリントを持っている。
「でも、良かったの？今日は浩十郎と町に行く予定があったんでしょ？」
「別に良い。シャルロットが居ないのなら行っても仕方ない」
「え？」
「なに、面倒な事でも好きな奴と一緒に居たほうが良いということだ」
そう言った宗一の頬は何時もの彼から想像できないがわずかに夕日の色とは違う赤に染まっている。
「宗一…」
「シャルロット…」
二人しか居ない廊下でお互いに相手だけを映した瞳。
そこに言葉はいらなかった。
オレンジ色の光景のなか、二人の影が徐々に重なって――
「―あ、れ？」
ぼーっとした頭で状況を確認する。
場所はＩＳ学園一年生両の自室。時刻は早朝六時半。
「……夢……」
はぁぁぁ……っと深くため息が漏れる。
ああ、せめてもう十秒くらい見ていれば…もう一度寝たら見れるかな
そう考えにいたりまたベッドに入る。
でもせっかくなら、もうちょっとエッチな内容でも宗一となら…

……
ボッ
「な、何を言ってるんだろうね、僕はっ」
赤くなった顔を隠すように頭の天辺まで布団を潜り、高鳴る心臓をなだめるのに苦心するシャルロットだった。

忍びＳｉｄｅ

タッタッタッ…
早朝恒例トレーニングをしている宗一は現在学園内をランニング中
「…どうしたものか」
シャルロットの気持ちを粗末にしたくはないが付き合う気は毛頭無い、ディニスとの約束も諦めさすための出任せ、だがアイツに似ているシャルロットを振るのも気が乗らない…どうしたものか
タッタッタッ…ツルッ
…古典的すぎるぞ、俺
ちょうど足下に捨ててあったバナナの皮を踏みすべって後頭部を強打、宗一はそのまま気絶してしまった。
数時間後

「……っつぅ、今何時だ？」
携帯の時計を見る。
…マズい、殺されるな
携帯をしまい自室へと急いで戻る。

部屋へと戻り制服へと着替え部屋を出る。…と
「！宗一、どうしたの」
扉を開けるとちょうどシャルロットが目の前を通り過ぎようとしていた。

「いや、気付いたらこの時間だっただけだ」
言えるわけが無いバナナの皮で滑って転んで気絶していたとは…
「っと、立ち話してる暇はない行くぞ」
シャルロットの手を取り食堂へと急ぐ。
「ぇっ宗一？」
「急がないと死ぬぞ」
食堂に着くと残っていた定食を適当に選ぶ。
「よっ。宗一、シャルロット」
声のした方向を見るとそこには一夏と篠ノ乃とラウラがいた。
「御館様、今日は遅いですね。どうかされましたか？」
ラウラが意外そうにそう言う。…っとその前に
「ラウラ、御館様言うな戦い方は教えてやるが弟子を取った覚えはない。つうか、何故御館様だ」
「日本では武道の師範の事を弟子は『御館様』と言い、熱い絆を深める時は殴り愛をすると聞きました」
誰だ、その武田名物を教えたのは…
「ラウラ、日本人として一つ言っておく。それは婆裟羅の世界だけだ」
そんなふうに喋っていると予鈴がなる。
…マズいな
「うわあっ！い、今の予鈴だぞ、急げ！」
そう、一夏が叫ぶも俺たちはすでに食堂を出てもうダッシュをしている。
「お、置いてくな！今日は確か千冬姉……じゃない、織斑先生のＳＨＲだぞ！」
「お前と心中するつもりはない」
「私もまだ死にたくない」
「右に同じ」
「すまない、嫁」
上から俺、篠之乃、シャルロット、ラウラ

生徒玄関に到着し靴を履き変える。
　ぁあっ、面倒だな！
「宗一、早く！」
何故か待っててくれたシャルロットと一緒に三階へと向かう。…これじゃ間に合わない、仕方ない
「シャルっ、舌噛むなよ！」
「へっ？」
そう忠告し、シャルロットを抱え―今回は肩に担ぐ方法でなく俗に言うお姫様抱っこで―黒影の背部のみ展開し、ブースターを吹かし三階まで駆け上がり教室に着くのと同時に黒影を解除する。
「間に合ったか？」
「おう、ご苦労なことだ」
　…幻聴か？
教卓の方を見るとブリュンヒルデがいた。
「本学園はＩＳの操縦者育成のために設立された教育機関だ。そのためどこの国にも属さず、故にあらゆる外的権力を受けない。がしかし」
スパァンッ
　初めて食らったが確かに凶器だなこれは
「敷地内でも許可されていないＩＳ展開は禁止されている。意味は分かるな」
「考えが浅かったです」
　まさか、もう居るとは…
「宗一、出来れば降ろしてくれないかな？」
　そういえばまだ抱えたままだったな。
「すまない、今降ろす」
「デュノアと服部は放課後教室を掃除して「少し待って下さい」…何だ服部？」
「規律を破ったのは俺だけです。シャルロットは俺が勝手に抱えて連れてきただけで何も悪くない筈です。掃除が罰なのなら俺だけ良

いはずです」
　勝手にこっちがやった事でシャルロットに迷惑が掛かるのはあまりにも可笑しい
「…そうか、お前がそれで良いのなら一人でしろ。デュノア、今回は服部に免じて見逃すが二度目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」
「あ、あの「…良いな？」…はい」「では、自分の席に行け。もうすぐ授業が始まる」
「はい…」「了解した」
席に着くため生徒席の方を見ると俺等が説教を受けているうちに来たのかラウラと篠ノ乃が着席していた。
キーンコーンカーンコーン
ガラッ
「おはよう織斑。重役出勤とは偉くなったものだな」
ガツッ
　…角で叩いたな。
「お前は速攻特別教育室行きだな。私が指導してやる有り難く思え」
「う、嬉し過ぎて涙が出ます…」
頭を押さえながら青い顔で応える一夏。…いや、それは痛みによるものでは？
「今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」このＩＳ学園は授業が少ないが、一般の高校と変わらず通常教科の座学も学んでいる。
中間テストは無いものの期末テストはあり赤点を取れば夏休み中は泣きを見るという状況に陥る。
「それと来週から始まる校外特別実習機関だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」
　そう言えばそんなものがあったな。七月頭の校外実習、いわゆる臨海学校だ。確か一日目は丸々自由時間。すなわちそこは海なので、

うちのクラスの女子のテンションは上がりっぱなしなわけだ。…宗子は違うが

そういえば、水着を買わねばならんな。今週末にでも浩十郎や一夏を誘って買いに行くか。…しかし、海か。どんなところなのだろう

「ではＳＨＲを終了する。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

余談だが山田先生の姿が見えない理由は校外実習の現地視察に行っているそうだ。それを聞いた女子達は少し不満を垂れていた。

拾捌　仏少女、妄想する（後書き）

次話は掃除と買い物の話を予定しております。

拾玖　忍び、仏少女と…（前書き）

一週間ぶりの投稿ですが何時も通りなので何時も通りでお願いします。

拾玖　忍び、仏少女と…

サッ、サッ
放課後、罰の掃除をしていると
ガラッ
「誰だ？…なんだシャルロットか。どうかしたのか？」
扉の前にもじもじとするシャルロットの姿が。
「その、大変そうだから手伝いに…」
「そうか、手伝ってくれるなら嬉しい。頼む」
「…う、うんっ」
なぜか嬉しそうな笑みを浮かべるシャルロット。…そんなに嬉しいのか…
「それで手伝うのは良いのが。大丈夫なのか？」
「うん、大丈夫だよ。だってさっき織斑先生が…」

仏少女Ｓｉｄｅ

数分前
「はぁ、僕はこんなところにいて良いのかな？」
廊下を歩きながら考え事をしているシャルロット。
　手伝いたいけど…織斑先生怖いし…
ドンッ
何かにぶつかり尻餅をつくシャルロット。
「イタッ」
「何をしているんだ、デュノア？」
聞いたことある声に顔を上げると…
「わひゃああっ？！」
「なんだ人を化け物みたいに驚いて…」

そこに居たのは織斑先生本人だった。
「す、すいません。少し考え事をしていたので…」
「ほう、察するに服部の事か？」「ど、どうして分かるんですか？」
「お、やっぱりか」
か、カマかけられた…
「そう落ち込むな。お前が考えそうな事第一位を言ってみただけだ」
「そうですか…」
「アイツは無愛想だが人付き合い悪いわけではない。言いたいことがあるなら言ったほうが良いぞ」
「織斑先生。臨海学校の事で話が…」
「ん？またか。まぁせいぜい頑張れよ小娘」
それだけ言い織斑先生は歩いていった。
「…それとデュノア。掃除の手伝いに関しては私は何も言ってないからな」
こちらを見るわけでもなく織斑先生は独り言の様に言い去っていった。

「って、言ってたから」
「そうか。なら安心だな」
と言い宗一は掃除を再開したので、僕も机を運びをする事にした。
着々と机を運んでいたんだけど一つだけ他のより重くて少し苦戦中。
「ん、んん～！」
「ん？シャルロット、あまり無理するな。それは確か岸里の机だから俺がやる」
き、岸里さんの？どおりで重いと思ったら…でもこれくらい
「へ、平気だよ。一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並みに―」
ツルッと重さに負けて足が滑る。
パシッ

後ろから誰かに体を支えられる。
「気を付けろ。怪我をしたら元も子もないぞ。それは俺が運ぶからシャルロットは他のを頼む」
「う、うん…あ、ありがとう…」
あれ、今って後ろから支えられてるよね？わわわっ…だ、抱き締められるのかな？ゆ、夢の続きみたいに…
「…っと、スマン。今離れる」
「あっ…」
も、もう少しこのままでも…
「…別に、よかったのに…」
「ん？何か言ったか？」
「な、何でもないっ」
「…そうか」
そんな事もありながら掃除を済ませていき十数分後掃除はおわった。
「手伝ってくれてありがとう。礼がしたいのだが…」
「別に良いよ。僕が手伝いたかったから手伝っただけなんだから」
それに久し振りに二人っきりの時間が過ごせたから僕としてはこれ以上は欲張りだと思う
「いや、日本の言葉に『親しき仲にも礼儀あり』というのがある友達といえど手伝ってもらったのだ多少なりともお礼がしたい」
…友達…ちょっと胸に刺さった…仕方ないけど
「そ、宗一がそこまでいうなら…」
「俺が出来る事の範囲内でなら何でも」
「……だったら、付き合って？」
……

拾玖　忍び、仏少女と…（後書き）

今回は内容的に短くなり買い物の話も入るはずでしたが、意外と長くなってしまい結局掃除だけになりました。
次話の投稿は出来れば水曜日に出したいと思います。

廿（上）　忍び、仏少女と…（前書き）

二週間ぶりの更新ですがいつもより短めです。
更新が遅くなった理由は単に気持ちが乗らなかっただけで今後もこういう時があると思うのでどうぞ暖かい目でお願いします。

廿（上）　忍び、仏少女と…

週末の日曜

現在、モノレール内に居りし候。されど隣にいる仏蘭西少女は早朝よりて気分が優れない様子で候

…というか何かしらの後悔を持っている様子だが…何のことか

「シャルロット…具合が悪いのなら買い物はまた後日ということにしないか？」

「はぁ…大丈夫だよ。具合が悪いわけじゃないから…ちょっと自分を恥じてるだけ…はぁあ」

先程からため息ばかりを吐いているが…何かあったのか？

「そうか。しかし、本当に良いのか、買い物付き合うだけで？」

「別に良いよ。それ以上を高望みしちゃいそうに…」

「それ以上とは？」

「な、何でもないよ！…そ、そういえば、宗一。覚えてる？」

「ん？何をだ」

「ほら、遅刻しそうになった時に…

『シャルっ、舌噛むなよ！』

って…」

あぁ、アレか

「すまない。嫌であったのなら謝る。次からは気をつける」

「そうじゃないよ。その、嬉しかった。愛称で呼ばれる初めてだったから…だから今度からも『シャル』って呼んでほしいんだけど…」

「…シャルロットがそういうのなら断る理由は無いが「人前で銃を出さないで」…分かった。なら、俺も『宗』で良い。俺が愛称で呼ぶのだからシャルも俺の事そう呼んでくれ」

「宗…えへへへ」
俺の名を呼び笑みを浮かべるシャル
気分も良くなったみたいだな。…と、ちょうど降りる駅だな
「シャル、降りる駅だぞ」
「え、あ。うん、分かった」
立ち上がったシャルに手を差し出した。
「混みあってるかもしれないから手をつないでも良いか？」
シャルは少し赤くなり差し出された手を握った。
…小さいな。まぁ、女の子だからな
俺はその手を引き駅前へと歩を進めた。

侍Ｓｉｄｅ

現在は曲がり角のところから二人の様子を観察中。
「……ねぇ」
「……何かな？」
「……あれ、手ぇ握ってない？」
「……握ってるね」
「……そっかぁ、見間違いでも白昼夢でもなくやっぱりそうなんだぁ……良いなぁ」
そう言い手を繋ぐ二人の後ろ姿を眺める鈴の姿を見、自分の右手を見た。
……頑張れ、俺！
「……」
無言で鈴に右手を差し出す。
「宗一にみたいに言う前に出せれば良いのになぁ」
そうため息を吐きつつもその手を取ってくれる鈴。
僕は震えそうになる体を抑えつつ宗の後を追うように駅前に向かう。

廿（上）　忍び、仏少女と…（後書き）

後編は買い物終了までの予定です。
あと、買ったはずの五巻が行方不明なので、もしかすると四巻の執筆が終了するとその後長い間更新しない可能性があります。
その辺は御了承いただけると有り難いです。

廿（中）　忍び、仏少女と…（前書き）

また短いです。
いつもどおりの目でお願いします。

廿（中）　忍び、仏少女と…

「水着売場は…此処のようだな」
駅前のショッピングモール、その二階にいる。
「そういえば、シャルも水着を買うのか？買い物に付き合ってくれといっていたが」
「そ、そうだよ。あの、宗はさ、その…僕の水着みたい？」
…なんと言ったものか…正直に言ってみるか
「見たくない見たいと言えば見てみたいな」
「そ、そうなんだ。見たいんだ。じゃ、じゃあ、せっかくだし新しいの買おうかなっ」
繋いだ手に軽く力をこめながらシャルは何度か頷く。…喜んでもらえて何よりだ
「では、男と女は売場が違うから、いったん別れるか」
「あっ…」
手を離したら、シャルは妙に心残りのあるような声を漏らした。…まだ、繋いでいたかったのか？
「買い物が終わったら、な？」
と子供に諭すように言うとシャル特有の笑みを浮かべた。
「じゃ、三十分後にここで」
「うん、分かった」
こくんと頷き、シャルは女性用水着売場に向かう。
俺はシャルを見送り、男性用の方に向かった。
取り敢えず、あまり奇抜なものは選ばずシンプルなグリーンの迷彩柄を選んだ。黒でも良かったのだが…前に全身黒一色の私服を見られシャルに見られ「もう少しお洒落に凝ってほしい」と言われたので、現在は某青いガンダムマイスターの私服を真似た服装をしている。
さて、約束の時間までまだ時間はあるが他によるところもないか

ら先に戻って待っているか
そう思い待ち合わせ場所に向かう。すると、そこにはすでにシャルが立っていた。
「早いな、もう済んだのか？」
「あ、ううん。ちょっとね、宗に選んでほしいなぁって思って」
「別に良いが。先の通り、俺はセンス無いぞ」
「その、宗か選んだものが良いの」
「…分かった。では実物を見に行くか」
そう言い女性用水着売場に足を踏み入れる。
日曜ということにあってか、そこそこ女性客の姿か目につく。
「そこのあなた」
女性客の一人がオレらの方を見て呼び掛けた。一つ言っていこう、あのアマは知り合いではない。
「ん？」
周りを見るが近くには俺等しか居ない。
「男のあなたに言ってるのよ。そこの水着、片付けておいて」
もう一度言おう、まったくの赤の他人だ。
ＩＳによる女尊男卑の風潮の典型的な形が目の前にいた。
「…それは僕がやることではないと思うのですが？」
少し下手に出て話し掛ける。こういう馬鹿（うましか）は強きに出すぎると『暴力を振るわれた』と喚く可能性が多いにある。
「ふうん、そういいこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね」
そう言い、女性客は警備員を呼ぼうとする。
「あの、このくらいで「お嬢様は、自分の始末もできない馬鹿でいらっしゃいますか？そんなのでは嫁の貰い手も来ませんよ」ちょっと宗っ」
コイツ、俺のいっちばん嫌いなタイプだな。他人の力を自分の物みたいに振るう大馬鹿者
「身なりからして…何処かのご令嬢というわけでもなさそうですし、

自分の事は自分でできますよね？後始末くらいできますよね？お嬢様？」
顔を真っ赤にさせていく馬鹿者は警備員を呼び寄せる。
「どうかされましたか？」
「こ、この人にいきなり殴られたんです」
さっきの態度はいずしらずと言う感じに怯えだす馬鹿者。
「なに！？ちょっと来てもらうか？」
「行くのは結構ですが…そこにある監視カメラを確認してから決めてください」
俺は入る前に確認した監視カメラを指差した。
「あのカメラの映像を見れば僕の無実は確定しますよ？ついでにそちらの女性の公務執行妨害、それと僕への名誉棄損も…」
馬鹿者の顔がサーッと真っ青になりヘナヘナと倒れた。
「まぁ、僕としてもこんな事でいちいち訴訟はおこしませんけど。では、僕はこの店で少しばかり友人の買い物付き合いますので何かありましたらもう一度此処にいらして下さい」
と言いシャルを引きつれその場から離れた。

侍Ｓｉｄｅ

「あ～あ、可哀想に。自業自得だけど」
その場からは慣れていく宗と落胆し警備員に肩を叩かれている女性を交互に見やる。
「あぁいうのって味方だとえげつないって他人事に思うけど、敵に回したら…もう最悪だね」
自分達の買い物そっちのけで近くの陳列棚に隠れてこそこそ観察中のカップルだった。

廿（中）　忍び、仏少女と…（後書き）

下はそれなりに長くなると思います。
あと、もしかしたら後々三つを一つにまとめる場合もありますので御了承を。

廿（下）　忍び、仏少女と…（前書き）

二週間ぶりの投稿となりますがいつも通りの出来です。
今までのように暖かい目でお願いします。

廿（下）　忍び、仏少女と…

「すまない。面倒ごとに巻き込んでしまって」
「別に良いよ。じゃあ、えっと、水着を見てくれるかな？」
「あぁ」
と返事をするとシャルが俺の手を引いた。…む？
少し疑問に思っていると、シャルはそのまま試着室に入ろうとした。
…ちょっ、待て！
「シャル、少し待ってくれ」
シャルは歩みを止めこっちを顔を近づけ
「僕たち、誰かに付けられてるんだけど。宗、分かってる？」
と聞いてきた。…あぁ、そのことか
「あぁ、侍と中国娘の二人だろ？とっくに気付いていた。だが、それほど気にすることでもない。普通に過ごしていればどこかに行ってくれるだろう」
そうとだけ言い、シャルの顔を離し
「だがな、シャル。尾行を撒くためとはいえ、さすがに此処には入れない。俺の第六感と宗子が止めておけと警鐘を鳴らしているんだ」
あいつらはお前が着替えてるうちになんとかすると説得した。
シャルは不満げな顔をしたが渋々納得し試着室の中に入っていった。
…さて、と
取り敢えず、あいつらに気付かれないように後ろに回り込む。
「…アイツ、常時無表情のクセに変な時に感情表に出すわよね」
「あれね、アイツの得意分野なんだよ。面倒ごとに巻き込まれたくないからさっきみたいに執事風の喋り方になって下手に出たり。一番嫌いなタイプだったら、その口調のまま毒づいたり…」
「あぁいうのって絶対友達できないタイプね」
「うん、ホントに友達は僕と後一人だけだったよ」
試着室を眺めることができるショーウインドの影に隠れ人の陰口を

言っていた。　…コホン
「お客様、ストーカー行為はあまり良いものと思えませんよ」
宗子の声色で後ろから声を掛けると、二人は飛び上がりそうなほど驚きこちらを見た。
「ゲッ、慶三」
「中国娘、人の心配する前に自分達の買い物を済ませろ。シャルみたいに水着買ったり」
「誰が中国娘よ！あたしには凰　鈴音って名前があるのよ」
「そうか、それは悪かったな。中国娘」
「ムッカーー！！」
「でだ、侍。さっさとこの喧しい鳳凰を連れて何処か行け。それで許す」
「誰が鳳凰よ！」
「ちょっと鈴、落ち着いて。宗、付けたのは悪かったとは思うけど言いすぎだよ」
今にも俺に襲い掛かってきそうな凰を押さえている浩十郎がそう言う。
「そんな事はない。お前達のせいでこっちは大変な目にあってたかもしれないからな」
試着室の方を見てシャルが顔を出してないことを確認する。
「だからさっさと目の前から消えてください。お願いします」
浩十郎に向け頭を下げる。
「そこまで嫌なの！？」
「…了解しました。じゃあ、もう邪魔しないのでデートをお楽しみください」
　デートではない。声に出して言わないが
浩十郎が凰を宥めながら去っていくのを確認し俺はシャルの居る試着室へと迎う。
試着室前に着くと

「あれ？」
「ん？」聞いたことある声が聞こえたのでその方向を見ると
「服部くん？」
「山田先生。ということは…」
周りを確認するもあの人が居ない。
「誰を探しているんだ？服部。待ち人か？」
後ろを見るとその人が居られた。
「いえ、山田先生単体では出現しないと思い、相方を…」
「相方とはなんだ？まぁ良い。お前はこんなところで何を」
「宗、誰か居たの？…って」
試着室のカーテンを少し顔を出すシャル。
「ひゃあああ！！？お、おり織斑先生！？」
「デュノア、人の顔を見て驚くのはどうかと思うぞ」「す、すみません。まさか居るとは思いませんでしたので」
「私たちも水着を買いに来たんですよ。あっ、それと今は職務中ではないですから無理に先生って呼ばなくて大丈夫ですよ」
そうは言われても、山田先生、織斑先生以外呼びようがない。
「…ふむ、山田先生。あちらの方に山田先生に似合いそうな水着がありそうです。行きましょう」
と何の脈略もなく織斑先生はそう言い一人勝手に歩いていく。
「あ、待ってくださいよ。それでは、くれぐれも人に迷惑を掛けないようにお願いします」
織斑先生の後を追い掛けていく山田先生。
「どうしたのかな？織斑先生」
「気を遣ってくれたのだろう。ところで、シャル。試着は済んだのか？」
「あ、うん」
こくりと頷くとシャルは試着室のカーテンを開けた。
「ど、どうかな？」
「……」

なんと言ったら良いか。
シャルが今身に付けている水着はセパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に別れているそれを背中でクロスして繋げた構造になっている。色は夏を意識した橙色の様な黄色で、正面のデザインはバランスよく膨らんだ胸の谷間を強調していた。
「へ、変かな？一応違う水着もあるんだけど…」
「い、いや！それで良いと思うぞっ。シャルらしい色で似合っているんじゃないか」
一瞬見惚れてしまったんだ、他のを見たら一瞬で固まってしまう
「そ、そう？じゃ、じゃあ、これにするね」
シャルはそう言い試着室のカーテンを閉めた。
さて、後は帰るだけだが…シャルに何か買ってやろうか？少し迷惑を掛けたしな。スイスに居たときの給料がたんまり残ってるしな

廿（下）　忍び、仏少女と…（後書き）

次話の投稿は一週間後を予定しており、もしかしたら今年最後の更新になるかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0190u/

-ISS・N- インフィニット・ストラトス 侍、忍び、異世界へ

2011年12月17日09時55分発行